

板 木

群馬県へき地教育研究資料第67集



「現存する板木」(みなかみ町)

平成31年3月

群馬県教育委員会
群馬県へき地教育研究連盟
群馬県へき地教育振興会

板 木

群馬県へき地教育研究資料第67集

序



へき地教育研究資料「板木」の歴史は古く、へき地教育連盟が発足した昭和27年から発刊し、今年度で第67集となりました。

「板木」とは、表紙にあるように、始業などの時刻を知らせるためにたたき板のことであり、へき地に学ぶ子どもたちのシンボルでありました。

本資料「板木」は、へき地教育を語る重要な資料であり、群馬県のへき地教育の営みの結晶であります。改めて、へき地教育の振興に御尽力いただきました多くの方々の御努力に対し、心から敬意と感謝の意を表します。

へき地教育の振興につきましては、昭和29年の「へき地教育振興法」の制定以来、さまざまな施策を実施してまいりました。今年度も、県へき地教育研究大会の開催、へき地教育振興会やへき地教育センター運営への補助などの施策を推進しております。

群馬県では、第15次群馬県総合計画「はばたけ群馬プランⅡ」において、「群馬の未来を担う子ども・若者の育成」を政策の第一に掲げ、「魅力あふれる群馬」の実現を目指して、郷土の誇りと愛着の育成、信頼される魅力ある学校づくり、多様な連携による人づくりなどを進めているところです。県内のへき地学校では、これまでも自然に恵まれた教育環境や地域とのつながりを生かした、特色ある教育活動が展開されております。また、小規模校ならではの特性を生かし、個に応じた指導の工夫・改善などにも努めていただいております。

今年度の県へき地教育研究大会は、高山村を会場に、「ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成」をテーマに行われました。班別研究協議では、「くらぶち英語村留学生の受入れを通じた互いの個性を認め合い、高め合う児童の育成」「地域にあるすべてのものを学習対象とした片品学を通じた郷土を愛し、郷土で活躍する人材の育成」を目指した2つの実践が報告され、熱心な協議がなされました。また、授業公開では、地域への愛着と確かな学力の育成を目指した5つの授業が提案され、どの授業においても子どもたちが協働性を発揮しながら学級全体で学ぶ姿が見られました。

このように、へき地教育に関わる皆様の御尽力により、着実にへき地教育の充実が図られております。これらの教育実践は、へき地校のみならず、すべての学校に多くの示唆を与えてくれるものです。今後もこれまでの実践の成果を踏まえつつ、へき地校ならではのよさを生かした教育を、なお一層推進していただきたいと思います。県教育委員会といたしましても、今後さらにへき地教育が発展するよう、関係市町村教育委員会、県へき地教育振興会、県へき地教育研究連盟と連携して、一層努力してまいります。

結びに、へき地教育研究資料「板木」第67集の刊行に御尽力された県へき地教育振興会、県へき地教育研究連盟の関係各位に対し敬意を表しますとともに、各教育機関において「板木」が十分活用されますことをご期待申し上げて序といたします。

平成31年3月

群馬県教育委員会

教育長 笠原 寛

「板木」第67集の刊行に寄せて



群馬県へき地教育振興会は、昭和29年「へき地教育振興法」の施行に伴い、本県へき地教育の諸条件の整備・充実を図ることを期して設立されました。そして、この目標を達成すべく、群馬県教育委員会、関係市町村、市町村教育委員会及び群馬県へき地教育研究連盟とともに、へき地教育に関わる種々の事業に取り組んでまいりました。この間、県当局をはじめ、関係各位の御尽力によって、複式学級の解消などへき地学校における教育条件の整備・充実に向けた取組が着実になされ、大きな成果を挙げてきております。これらは、へき地教育に献身的に取り組まれてきた先生方や、地域において様々な御支援をくださっている多くの方々の御尽力の賜であると心より感謝申し上げます。

本県における本年度のへき地指定校は32校であり、へき地校に通う児童生徒の数は減少の傾向にあります。しかし、へき地校に通う児童生徒を見ると、心身共に健やかで、地域をよく知り、地域を好きになる子が増えているように感じます。これは、児童生徒の個性や学習状況を把握し、小中学校の9年間の成長を見通した細かな指導が一人一人に応じて行われたり、豊かな自然やこれまで大切に守られてきた地域の伝統や行事などを生かした教育を推進していただいたりしているおかげだと考えております。このように、学校と地域が一体となつてきめ細かに子どもたちを育成することは、教育の原点であり、県内すべての学校で重視されるべき教育であると考えております。

これからの時代は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、予測が困難な時代となり、子どもたちの置かれている環境は、大きく変化していくことが予想されます。このような時代であることを強みと考え、子どもたちには、様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働しながら、一人一人が個性や能力を伸ばし、自ら学び自ら考える力を身に付けるとともに、郷土ぐんまにより一層誇りと愛着をもってほしいと願っています。

このたび、へき地教育研究連盟の皆様方が中心となつて、本県へき地学校で行われている特色ある教育実践等をまとめた「板木」第67集が刊行されますことは、本県のへき地教育の現状と課題を明確にできるとともに、今後のへき地教育の振興を一層図ることに役立つ大変意義深いものと考えます。関係各位におかれましては、へき地教育に関する研究や実践をまとめたこの「板木」を十分御活用いただき、群馬県のへき地教育のさらなる発展・充実のために御尽力くださいますよう、心よりお願い申し上げます。

最後に、平素よりへき地教育の振興に御協力いただいております県当局をはじめ、県教育委員会、関係市町村、市町村教育委員会及び各地域の皆様、厚く御礼申し上げますとともに、一層の御指導と御協力をお願い申し上げます、刊行に寄せての挨拶といたします。

平成31年3月

群馬県へき地教育振興会

会 長 星野 已喜雄

「板木」第67集の発刊にあたって

平素より関係の皆様にはへき地教育並びに群馬県へき地教育研究連盟の活動に対しましてご支援とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

今年度も群馬県へき地教育研究資料「板木」が第67集として発刊の運びとなりました。「板木」は、群馬県へき地教育の貴重な資料として長年活用されてきています。これまで「板木」の発刊に携わってこられた多くの皆様のご尽力に対しまして心から敬意を表します。

さて、全国へき地教育研究連盟では、現在、研究主題として「ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成」を掲げ、平成26年度より第8次長期5か年研究推進計画(8次長計)を進めてきました。1年目には第63回全国へき地教育研究大会群馬大会が開催されましたことは記憶に新しいことと思います。そして、今年度が8次長計の最終年度となり、「歴史と伝統の京都から人とつながり 挑戦し続け 未来を切り拓く子どもを育もう」を大会スローガンとして京都で大会が開かれました。台風21号が近畿地方を直撃した爪痕が残る地域もありましたが、京都府内各地で素晴らしい実践発表と研究協議が行われました。本刊の後半に、第67回全国へき地教育研究大会(京都大会)の概要報告を掲載しております。この全へき連の研究主題は、「全国は一つ」のスローガンの下、群馬県へき地教育研究連盟でも同様に掲げて取り組んでいるものです。本刊の前半に県内の取組を載せてあります。また、11月2日(金)には第67回群馬県へき地教育研究大会(県へき大会)をBブロックが担当し、高山村いぶき会館を全体会・班別協議会会場、高山小学校、高山中学校を公開授業・授業研究会会場として開催しました。その概要、提案、指導案等も本刊中程に載せてありますので、ご覧ください。

今年度の県内のへき地学校数は昨年と変わらず小学校18校、中学校14校、計32校です。平成20年度は小学校39校、中学校18校、計57校であり、この10年で約半減となりました。先述の県へき大会は有意義な大会となりましたが、中学校会場では各授業研究会ごとの参加者が少なく、やや寂しい感じもありました。本へき地教育研究連盟も、組織の在り方や研究大会等の開催方法について、へき地指定ではない小規模校を巻き込むことも含め、進化・発展する方向での具体的な取組を進める必要があります。

へき地校の減少は、本県だけではなく全国的な傾向でもあります。長らく発行され貴重な情報源でもありました「全国へき地教育新聞」ですが、購読数減少に伴い、今年度をもって廃刊となります。来年度からは、全へき Web ページからの閲覧となる予定です。

また、来年度からは9次長計が実施となります。研究主題「ふるさとに夢や誇りをもって、未来の創り手となる子どもの育成 ～へき地・複式・小規模校の特性を生かした学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～」に沿った研究となりますが、これまで積み重ねてきた教育実践を基に新たな課題解決に向けた研究を推進していきたいと考えています。

結びになりますが、「板木」第67集発刊にあたり執筆や編集に携わっていただきました先生方に御礼を申し上げますとともに、日頃よりご指導とご支援をいたしております群馬県教育委員会並びに群馬県へき地教育振興会をはじめ、関係の皆様には深く感謝申し上げます、発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。

平成31年3月

群馬県へき地教育研究連盟
理事長 角田 栄寿

も く じ

序 文

序	群馬県教育委員会教育長	笠原 寛	
「板木」第67集の刊行に寄せて	群馬県へき地教育振興会長	星野 已喜雄	
「板木」第67集の発刊にあたって	群馬県へき地教育研究連盟理事長	角田 栄寿	

第1部 へき地教育の振興

I へき地の学校経営

〈1〉 小学校	上野村立上野小学校長	根岸 勝良	1
〈2〉 中学校	中之条町立六合中学校長	中沢 博	3

II 学習指導の改善に関する実践的な研究 5

片品村立片品小学校長	樋口 徹	
------------	------	--

III へき地学校における生徒指導の実践

〈1〉 小学校	嬭恋村立東部小学校長	篠原 彰仁	7
〈2〉 中学校	沼田市立利根中学校長	登坂 一彦	9

第2部 へき地学校教員研修のあゆみ

I 平成30年度へき地学校教員研修の概要 11

群馬県へき地教育研究連盟研究部長		
東吾妻町立坂上小学校長	尾澤 順子	

II 第67回群馬県へき地教育研究大会

〈1〉 概要 12

群馬県へき地教育研究連盟研究部長		
東吾妻町立坂上小学校長	尾澤 順子	

〈2〉 提案要旨

《小学校班》高崎市立倉渕小学校長	小池 政一	13
《中学校班》片品村立片品中学校長	雲越 誠司	15

〈3〉 公開授業・授業研究会

《高山村立高山小学校》

① 小学校 第3学年（理科）		17
高山村立高山小学校教諭	谷川 篤	

② 小学校 6 学年(学級活動)	-----	19
高山村立高山小学校教諭	須藤 義昭	
《高山村立高山中学校》		
① 中学校 第1 学年(国語)	-----	21
高山村立高山中学校教諭	佐藤 圭介	
② 中学校 第2 学年(理科)	-----	23
高山村立高山中学校教諭	奈良 達也	
③ 中学校 第3 学年(英語)	-----	25
高山村立高山中学校教諭	剣持 裕行	

Ⅲ 第67回全国へき地教育研究大会(京都大会)

〈1〉 概要報告	-----	27
群馬県へき地教育研究連盟理事長		
草津町立草津中学校長	角田 栄寿	
〈2〉 分科会報告		
A分科会	高崎市立宮沢小学校長	中町 文彦 ----- 28
C分科会	長野原町立北軽井沢小学校長	山野 悟 ----- 29
D分科会	安中市立細野小学校長	萩原 孝志 ----- 30
E分科会	中之条町立六合小学校長	山本 政行 ----- 31
F分科会	草津町立草津中学校長	角田 栄寿 ----- 32
G分科会	沼田市立利根中学校長	登坂 一彦 ----- 33
H分科会	片品村立片品中学校長	雲越 誠司 ----- 34
I分科会	吾妻教育事務所指導主事	朝比奈幾哉 ----- 35

《資料》

I	平成30年度へき地学校資料	-----	36
II	平成30年度群馬県へき地教育振興会役員	-----	39
III	平成30年度群馬県へき地教育研究連盟役員	-----	40
IV	平成30年度群馬県へき地教育センター指導員	-----	41
V	平成30年度へき地教育功労者	-----	42

あとがき	-----	43
------	-------	----

第 1 部

へ き 地 教 育 の 振 興



群馬県へき地教育研究大会 開会式



群馬県へき地教育研究大会 班別研究協議

I へき地の学校経営

〈1〉小学校

すすんで学び 心豊かに たくましく生きる児童の育成

上野村立上野小学校長 根岸 勝良

1 学校の概要

上野村は群馬県で最も南に位置する標高 450 m以上の急峻な山村である。村の 97 %が森林であり、村を東西に横断するように関東一の清流「神流川」が流れている。人口は 1200 人不足で県内最小の自治体である。そして、I ターン人口が全体の 20 %を超える点も大きな特徴である。

本校は村内唯一の小学校で、児童数 46 名、そのうち山村留学の児童が 6 名である。学区が広い児童の 9 割以上がスクールバスや路線バスで通学している。教職員 20 名、学級担任の平均年齢は 29 歳という非常に若い教師集団である。家庭・地域からの熱心な協力体制に加えて、行政からの強力な支援を受けており、自然、歴史、文化の面と合わせて素晴らしい教育環境が整っている。特に、本年度から村の施策として民間塾「花まる学習会」と提携した授業をスタートさせ、思考力を高める取組を進めている。こうした地域の背景をもとに、新学習指導要領の道徳科の実施を受けて、本校では道徳科と特色ある体験活動を軸として、未来に向かってすすんで学び、心豊かに、たくましく生きる児童の育成を目指している。

2 学校教育目標

(1) 基本目標 すすんで学び 心豊かに たくましく生きる児童の育成

(2) 目指す児童像と具体像

- ・ すすんで学ぶ子（自ら考え、相手を意識して自分の思いや考えを表現できる）
- ・ 思いやりのある子（上野村を愛し、礼儀正しく、誰とでも認め合い励まし合う）
- ・ じょうぶなからだをつくる子（規則正しい生活を送り、進んで体力づくりに取り組む）
- ・ ねばり強くやりぬく子（失敗を恐れず挑戦し、自信をもって最後までがんばる）

3 学校経営の方針

『元気ある信頼される学校』

- (1) 経営への参画意識を高め、具体的・組織的な教育活動に努める。
- (2) 学び合う教師集団づくりに努め、指導力の向上を図る。
- (3) 地域と協働し、開かれた学校づくりに努める。
- (4) 児童の健康・安全に配慮した学校づくりに努める。
- (5) 小・中学校の連携を推進し、9年間を見通した指導に努める。
- (6) 特別支援教育への校内指導体制を整備・充実させる。

4 実践の概要

(1) 道徳科の充実

すすんで学び、心豊かな児童を育てるためには主体的に考えをもつこと、積極的に交流し多様な考えに気づくこと、その考えを尊重し合いよりよい方法をさがすことが必要である。そして、この推進には全校体制による同一歩調の授業を積み上げていくことが大切である。本年度

は校内研修主題を「お互いの考えを深め合う児童の育成」（多角的・多面的に考える道徳科の指導を通して）として実践を進めてきている。

① 上野小授業スタンダードの実践

- ・ 受容的・肯定的な態度、発表場面でのあたたかい聞き方の徹底
- ・ 授業の流れと板書の統一化
- ・ 掲示物の共通化と蓄積

② 一人1研究授業による指導力の向上

- ・ 1学期初めに道徳教育推進教師によるモデル授業により方向性を提示
- ・ 道徳教育推進教師、校内研修主任を軸とした研究授業への授業作り体制の確立
- ・ ブロックによる合同授業の実施
- ・ 職員研修日の設定（木曜日）と日常的な放課後の学び合い



あたたかい聞き方（発表者の方を向いて聞く）

(2) 体験活動の充実

心豊かに、たくましく生きる児童を育てるために本校の特色である縦割り班活動と地域のよさを生かしたチャレンジスクールを充実させたいと考えた。これまでの活動を見直し、児童同士の豊かな関わり方、郷土を愛したくましく生きる姿の実現を目指してきた。

① 児童会活動全体計画の見直しと実践

- ・ 目指す児童像の明確化、行事ごとのねらいと各行事のつながりの明確化
- ・ マリーゴールド学習の支援の工夫（日航機事故以来33年間継続している学習）
- ・ 行事ごとの振り返りと次行事への意識化

② チャレンジスクールの充実

（地元の施設で行う2泊3日の合宿体験）

- ・ 計画と運営を全て自主的に行うことによる生きる力の育成
- ・ 豊かな体験による地域の自然・歴史・文化・人材の素晴らしさの再確認



マリーゴールド学習（植え替え集会）



チャレンジスクールで郷土料理を学ぶ

5 終わりに

授業と行事のどちらにおいてもゴールの明確化と手立ての具体化を図ったことで、児童の活動の質を高めることができた。また、小規模校のよさを生かして学校全体で歩調をそろえて取り組むことにより、全校児童の姿が活気にあふれたくましく変わってきている。特に道徳科に力を入れたことは、お互いを認め合い協力し合う人間関係づくりにつながり、豊かな心を育成する上での大きな基盤となっている。

今後は、社会に開かれた教育課程を踏まえて、家庭や地域と目標を再確認し、実現に向けて連携・協力していきたいと考える。

〈2〉中学校

地域及び園・小・中の連携を生かした教育の推進

中之条町立六合中学校長 中沢 博

1 学校の概要

本校の学区は、吾妻郡の北西部に位置し、大半は山林で、白根山麓の白砂川沿いの谷あいには集落が点在している。高山植物の宝庫である野反湖、湿原が点在する芳ヶ平、天然記念物のチャツボミゴケの群生地など、豊かな自然があり、これらの自然とともに育んできた伝統文化が今も多く残されている。学区内には、六合こども園、六合小学校があり、行事やPTA活動を中心に連携が活発に行われ、地域との結びつきも強い。

学校規模は、生徒数20名、教職員数12名、3学級の小規模校である。生徒は、素直で、教員の指示に従い、学習や行事の準備、片付けなどに大変しっかり取り組むことができるが、おとなしく、自分の考えを発表することが苦手な生徒が多い。

2 学校教育目標

- (1) 基本目標 強い意志と創造力をもった、心身ともに健康で、人間性豊かな生徒の育成
- (2) 具体目標 目指す生徒像【生き生きと活動する生徒】
 - 意欲をもち進んで学ぶ生徒
 - 心豊かで思いやりのある生徒
 - たくましく個性を伸ばす生徒



3 学校経営の方針

- (1) 学校課題（少人数による弊害）の解決に向けて特色ある教育課程の編成・実施に努める。
- (2) 生徒一人一人の良さや可能性に目を向けながら自己肯定感を高め、たくましく生きる力の育成に努める。
- (3) 生徒による自治的な活動を大切にし、生徒主体の明るい学校づくりを進める。
- (4) 地域の人たちの協力を得て、地域にある自然・伝統文化を取り入れた教育活動を推進する。
- (5) 六合こども園、六合小学校と様々な分野で連携・協力し、一貫した教育を推進する。

4 実践の概要

(1) 地域との連携

① シラネアオイ植栽活動

野反湖周辺にかつて自生していたシラネアオイの群落の復元活動の手伝いを始めて、今年度で23年目になる。5月下旬、シラネアオイの花が咲く頃、全校生徒で昨年度植えた苗がどうなっているか観察に行く。9月中旬に、この植栽活動を中心になって行っている山口さん宅の裏山に行き、苗掘りを行う（毎年1000株ほど用意）。9月下旬、野反湖へ行き、植栽活動を行う。この行事は中学生が中心だが、町当局も全面的に協力する。一般の方の参加もあり、遠く町外から来る人もいる。今年度、長年継続して取り組んできた植栽活動が認められて、『全国森林レクリエーション 地域美しの森づくり活動コンクール』で表彰された。



② ふるさと研究

この活動の前身は、今から約40年ほど前に入山中で始められた「入山研究」と呼ばれる郷土学習である。現在は総合学習として地域の伝統・文化・自然等を扱っている。全学年縦割りで5グループに分かれ、テーマを決め、夏休みの現地調査等を中心に地域密着の学習活動を行っている。地域の方々も大変協力的で、毎年行われる六合地区合同文化祭での発表をとっても楽しみにしている。今年度の5班の発表内容は、「六合の郷土料理」「六合の地名の由来」「太子駅と群馬鉄山のつながり」「六合の自然の魅力」「六合の観光地、特産物」だった。

③ その他

地域からボランティア講師を招き、楽しくふれあいながら、芸術（制作活動）に親しむ「ふれあい体験」、夏休みに生徒がいくつかのグループに分かれて行う地域美化活動「生徒会ボランティア」などの活動を行っている。

(2) 六合こども園・六合小学校との連携

① 合同で行う各種行事

ア 「合同運動会」は、今年度6年目である。事前に管理職と体育主任をメンバーとする運営委員会を開き、プログラム・練習計画・準備・係分担などについて検討する。種目の中には、園児児童生徒と一緒に演技する種目もあり、交流も深まった。保護者・地域の方々も多く参加し、子どもたちの活躍が認められる良い機会になっている。

イ 「六合総合文化祭」は、地域と園・小・中学校の合同で開催され、今年で5年目になる。ステージ発表、展示発表、体験活動で構成されている。地域の方もたくさん来場され、子どもたちの学習の成果を見てもらう良い機会になっている。



② 子どもたちの学び・発達を支援する組織

ア 「六合地区学校保健委員会」では、子どもたちの健康を守ることをテーマに、生活チェックリストの実施、広報活動、研究協議会の開催を行っている。今年度の重点的な取組は、アウトメディアである。

イ 「六合地区園小中PTA連絡協議会（六P連）」では、園・小・中学校PTA間の連絡調整を図り、教育向上のためのPTAの在り方について検討することを目的としている。夏・冬の情報交換会、PTA講演会の開催、交流会などの事業を行っている。

ウ 「六合地区園小中連携一貫協議会」は、これまでの園・小・中の合同行事の意味を再確認したり、教育課程の接続や基礎学力の向上へと高めていくために、昨年度設立された。今年度は、15年間の子どもの発達と学びを見通し、部会ごとに具体的な取組を実践していきたいと考えている。

5 おわりに

新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」について、よりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、そのために、「学校は、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくことが重要である」としている。また、「学校間の接続」については、「教育が円滑に接続され、義務教育段階の終わりまでに育成することを目指す資質・能力を、生徒が確実に身に付けることができるよう工夫することが重要」と説明している。本校では、これまでに地域との連携及び園・小・中の連携を多く実践し、地域の良さを知り、それを守ろうとする心を育んだり、多くの人とのふれあいを通して思いやりの心や人と交わることの大切さを学んできた。また、地域活動を通して、地域貢献できた自分自身を振り返り、自己有用感を高めることができた。

今後数年で生徒数が大幅に減少することが予想されており、これまでとは違った方法を考える必要があるが、工夫改善しながらも、このような特色あるべき地教育の良さが残ることを切に願う。

Ⅱ 学習指導の改善に関する実践的な研究

自分の考えをもち、表現できる児童の育成

～各教科等における「説明し合う活動」を通して～

片品村立片品小学校長 樋口 徹

1 学校の概要

本校は、利根郡片品村の中心部の鎌田地区に位置している。片品村では昭和40年から長い間、片品小学校、片品北小学校、片品南小学校、武尊根小学校の4小学校であった。

近年、児童数が減少したこともあり、平成26年に片品北小学校との統合が行われ、平成28年には片品南小学校、武尊根小学校との統合が行われた。現在の片品小学校は統合後3年目である。

全校児童数163名、学級数8（各学年1学級＋特別支援学級2）、純朴で素直な児童が多い。統合後の児童の融和を図るため、縦割りの団活動や児童主体のいじめ防止活動などを取り入れたこともあり、落ち着いた雰囲気では学校生活を送っている。

統合にあたり、学校経営面では今までの片品小学校のものを基本に、学校教育目標を「高い知性、豊かな心情、たくましい意志と創造力をもった心身ともに健全な実践力のある子どもの育成を期する」（具体目標：進んで学習する子、なかよく助け合う子、ねばり強く丈夫な子）とした。

2 研究主題設定の理由

昨年度は、学校教育目標のうち「進んで学習する子」の育成に重点をおき、算数科の時間を中心に「説明し合う活動」を取り入れ、自分の考えを根拠や理由を示しながら表現することができる児童を育成することを目指した。特に、ペアやグループでの活動から全体で共有するという流れをベースに、自力解決したことを適切な表現で説明することができるよう話型を意識させたり、図や表・式など、表現しやすい方法を選ばせたりするなどの工夫を取り入れた。これにより、児童は「説明し合う活動」に次第に慣れてきて、自分の考え方を友達に説明することに抵抗なく取り組む様子が見られるようになってきた。

一方で、説明する際に算数の用語をうまく使えない児童が見られたことや、「説明し合う活動」がうまくいかず「一方通行」になってしまうなど、十分にその効果が現れなかったことなどが課題としてあげられた。これは、他の児童の考えをしっかりと受けて自分に戻し、深める場面の工夫が不十分であったことが原因であると考えられた。

本年度、本校は全学年で教科担当制を推進することとした。一部の教科を除き初めての実践であるが、主体的・対話的な学びに関連し、各教科で取り組むことが妥当であると考えた。そこで、昨年度に引き続き「進んで学習する子」の育成に重点を置き、算数に限らず各教科等において「説明し合う活動」を効果的に取り入れ、自分の考えを深めたり広げたりできる児童を育成したいと考え本主題を設定し、全職員で協力して実践に取り組むこととした。

3 実践の概要

(1) 研究のねらい

各教科の問題解決的な過程において、児童が自分の考えをもち根拠や理由をもとに説明し合う活動を取り入れることにより、自分の考えを深め、より分かりやすく表現できる児童を育成する。

(2) 目指す児童像

児童の発達段階を考慮して低・中・高学年の各ブロックごとに設定することとした。具体

的には以下のとおりである。

低学年	中学年	高学年
○自分の考えを、「・・・だから」と理由をつけて話したり書いたりし、話し合う中で友達との違いを見つけられる児童	○自分の考えを順序や理由をつけて話したり書いたりし、共通点や相違点を見つけ、よりよい意見を取り入れられる児童	○自分の考えを根拠をもとに整理して言ったり書いたりし、一般化できる考えを別の場面で発展的に考えられる児童

(3) 研修に関するキーワード

① 「自分の考えをもつ」について

理由や根拠をもとにした「考え」をもつことが重要であるといえる。そのために、興味・関心を高め主体的に考えがもてるよう、必要に応じて具体物や図、式、定義などを使って考える方法を例示するなどし、学習状況に応じたきめ細かい支援を行っていく。また、ワークシートやノートに記述する際に「まず」「つぎに」「だから」などの言葉を用いて自分の考えを整理することができるよう助言していく。

② 「説明し合う活動」について

児童一人一人が自分の考え方を書き、それを小集団や全体で話し合う活動である。つまり与えられた課題に対して、根拠や理由を明確にして自分の言葉で説明し合う活動ととらえる。この時、単に考えを発表する場にならないように、聞く方の児童は「どこが似ているか（違っているか）」「なぜそう思うのか」などのポイントを意識して話を聞き、質問したり感想を述べたりするなど、発言した児童への反応を示せるようになると双方向の対話的交流となり、より充実した活動になっていくと考える。

(4) 具体的実践（日常実践と一人1研究授業）

① 単元や題材など、内容や時間のまとまりを見通して学習の流れを構想し、どの場面で「説明し合う活動」が効果的であるかをしっかり吟味する。

② 「説明し合う活動」を効果的に取り入れた授業展開の工夫をする。時間配分や形態に十分配慮した上で、たとえ同じ考えであってもきちんと一人一人に説明させるようにする。

③ 自分の考えをもつ段階において、個別支援の方法について工夫する。

④ 発達段階に応じた「目指す児童像」を意識して「説明し合う活動」を位置付けるとともに、授業中だけでなく教育活動の様々な場面で実践できるように指導していく。

⑤ 学年ブロック会議を充実させ、アイデアを出し合うなど協働研究を進める。

4 成果と課題

○ 各教職員が担当する教科等において、「説明し合う活動」を意図的に取り入れた実践を行うことにより、児童は説明し合うことに慣れ親しみ、自分の考えを分かりやすく表現しようとする意欲が出てきたと考える。また、相手の考えを聞いてそれを自分の中で消化して考えを深め、自分の説明をより確かな分かりやすいものにしていく児童も見られるようになってきた。徐々に目指す児童像に近づきつつあると考える。

○ 「説明し合うこと」が必要となるような、また「説明しよう」という意欲が高まるような授業構成を考え実践していく必要がある。さらに、「説明する活動」はねらいを達成するために用いる手段であり、それ自体が目的とならないように配慮していく必要がある。

Ⅲ へき地学校における生徒指導の実践

〈1〉小学校

認め合い、助け合える児童を育成する生徒指導

～「明日も通いたくなるあったかい学校づくり」を通して～

孺恋村立東部小学校長 篠原 彰仁

1 地域・学校の概要

本校は、浅間山麓の北側に位置し夏秋キャベツの生産量日本一の孺恋村にある児童数193名、学級数10学級のへき地校である。

孺恋村立東小学校と孺恋村立鎌原小学校の2校が平成25年4月統合し、旧孺恋村立東中学校を改修し開校、今年で6年目を迎えた。統合により通学範囲が広大な孺恋村の東半分拡大したため、児童の75%がスクールバスを利用し、その路線は7系統ある。

近隣は、猿や猪、熊などの野生動物の目撃情報も多く日頃より地域関係機関と連携しながら児童の登下校の安全確保に心がけている。児童は素直で明るく、保護者も学校教育に協力的である。

2 生徒指導の方針

(1) 学校経営の方針

- ① 「授業づくり」「仲間づくり」「習慣づくり」を重点に、児童が「明日も通いたくなるあったかい学校」づくりを通して、学校教育目標の実現を図る。
- ② 「我が子であれば」の視点を持ち、授業づくりと学級づくりを連動させ、児童を学習に向かわせる基盤づくりを心がけ、児童及び家庭・地域から信頼の得られる教育実践を行う。

(2) 生徒指導の方針

学校経営の方針を受け、以下を本年度の生徒指導の方針としている。

① 認め合い・助け合える仲間づくり

学級活動の充実、異年齢集団活動の推進、児童会活動の充実を図る中で、認め合い・助け合える仲間づくりを通して、いじめ防止対策を推進する。

② 分かる授業・楽しい授業づくり

高学年教科担当制を実施し、教科・生徒指導の充実を図るとともに、個に応じたきめ細かな指導、家庭学習の充実、読書活動の推進を中心に、学力向上のための組織的な取組を通して、学力向上対策を推進する。

③ 健康的な生活・運動習慣づくり

早寝・早起き・朝ご飯や家庭学習・メディア利用の時間管理など生活時間のスケジュール化、村保健室の協力を得た生活習慣検査の実施などを通して、基本的な生活習慣の定着を図るとともに、外遊びの励行や運動に親しむ機会を増やすことで、規則的な運動習慣の確立を目指し体力向上対策を推進する。

3 実践の概要

(1) 異年齢集団活動（団別清掃・団別遊び）

毎日の「団別清掃」と毎月の「団別遊び」を実施し、異年齢集団の温かい人間関係づくりを目指している。特に、団別清掃では、高学年児童が低学年児童に清掃の仕方を教えたり、重い荷物や高いところの清掃に手を貸している。団別遊びでは、1単位時間（45分）を使い、各団

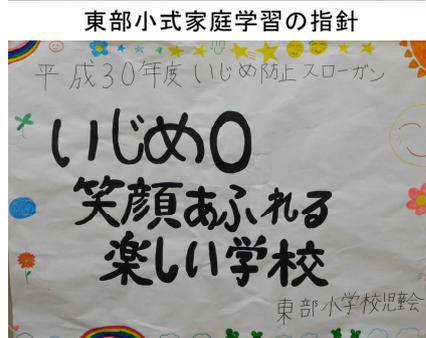
の6年生が小さい児童も安心して遊べるように企画・運営している。

(2) わかる授業・楽しい授業づくり（高学年教科担当制・東部小式家庭学習の指針）

高学年では、国語科及び算数科をはじめ、ほとんどの教科で教科担当制を実施している。これは、教員の得意分野や専門性が生かされることで、工夫した授業が行われ児童の学習意欲を高めることができるので、学力向上が期待できる。併せて、複数の教員が児童に関わることで、児童を多面的に捉えそのよさを伸ばすことができるので、生徒指導の充実が図れると考える。

	つくる	つける	のぼす
低学年 学年学習計画 を身に付ける	・時間 30分以上 始める時間を決めて ・内容 宿題 ・電算 タブレットを前して、静かな中で	・ドリルなど（算数、基礎） ・漢字練習 ・音読 ・日記（連絡帳） 家の人に確認してもらう	・ドリルなど（算数、活用） ・国語プリント （授業の振り返り）
中学年 基礎的・基本 的な知識・技能 を身に付ける	・時間 45分以上 始める時間を決めて ・内容 宿題、自主勉強 ・電算 タブレットを前して、静かな中で	・ドリルなど（算数、基礎） ・漢字練習 ・音読 ・日記（連絡帳） 家の人に確認してもらう	・ドリルなど（算数、活用） ・国語プリント （授業の振り返り） ・自主勉強 （ワークシート） （復習・学習）
高学年 知識・技能を 活用する力を 身に付ける	・時間 60分以上 始める時間を決めて ・内容 自主勉強、宿題 ・電算 タブレットを前して、静かな中で	・ドリルなど（算数、基礎） ・漢字練習 ・音読 ・日記（連絡帳） 家の人に確認してもらう	・ドリルなど（算数、活用） ・国語プリント （授業の振り返り） ・自主勉強 （ワークシート） （復習・学習）

また、村で統一して推進している「婦恋村学びの約束」を受け、東部小式家庭学習の指針を各家庭に配布し、家庭学習の目標時間や学習内容の例を示し、学びの習慣づくりに取り組んでいる。



いじめ防止スローガン

(3) 児童会活動の充実（挨拶運動・いじめ防止）

児童が気付き・考え・進めていくという、児童の主體的な取組を教職員が支援することで、よい雰囲気为学校（毎日来なくなる学校）となるよう児童会活動の充実を図っている。



いじめゼロサミット

児童会本部を中心に、年間活動計画に沿って挨拶運動やいじめ防止に向けた取組を展開している。特に、「東部小いじめゼロサミット」は、各学年・学級がいじめ防止について話し合い、その具体策を発表する人権集会であり、児童会本部がその企画・運営に当たっている。こうした取組は、児童の自尊感情（自己存在感や自己有用感）を育成し、いじめ防止対策に効果的であると考える。

(4) 望ましい生活リズムづくり（生活習慣チェックリスト・規則的な運動習慣の確立）

本校では、目指す児童の生活習慣を「早寝・早起き・朝ご飯」に置き、学校と家庭が連携・協力し、指導の徹底を図っている。特に、児童に日課表を作成させ、家庭における学習とメディア利用の時間をしっかり位置付けさせるなど、生活時間のスケジュール化を促している。



朝の自主マラソン

さらに、児童の多くがスクールバスで登下校していることから、児童の体力低下が懸念されることや、運動に親しむ資質・能力の育成のため、外遊びの励行や自主マラソンなどを通して運動習慣づくりを推進している。

4 おわりに

本校の特色は、「学年を超えた仲の良さ」である。これは、実践の概要にあるような様々な仲間づくりを意識した取組の成果であると考えられる。しかし、メディア（ゲーム・スマートフォン）利用での問題も散見されるようになっている。今後は、保護者の理解と協力を得ながら、保護者への適切なメディア利用の啓発を図るとともに、児童への指導を行い、「明日も通いたくなるあったかい学校」づくりを推進していきたい。

〈2〉 中学校

地域を愛し、主体的に生きる生徒の育成

～郷土愛と主体性を育む組織的・計画的な生徒指導を通じて～

沼田市立利根中学校長 登坂 一彦

1 学校の概要

本校は、沼田市中心部から北東へ20kmほど離れた利根町追貝に位置し、周囲を比高400mを超える山々に取り囲まれ、すぐ南に栗原川、西には片品川が流れる。本校から北西約500mの片品河岸は、国の天然記念物に指定されている吹割溪ならびに吹割瀑で有名である。また、校区内には老神温泉もあり、大自然の景観と温泉を楽しみに全国各地から観光客が訪れている。

昭和22年に東村立東中学校として開校した本校は、利根村立東中学校、利根村立利根中学校を経て、平成17年の市町村合併により沼田市立利根中学校となって現在に至る。今年度の生徒数は74名で、特別支援学級2学級を含む5学級からなる小規模校である。生徒は、素直で挨拶もよくでき、決められたことには真面目に取り組む。保護者や地域の方々も学校に対して協力的で、学校行事への参加率も高い。

2 生徒指導の基本方針

(1) 生徒指導の方針

① 組織的な生徒指導を展開する。

- ・全職員による生徒指導體制の下、情報交換と共通理解を大切にし、生徒一人一人を多面的・総合的に理解し、適切な働きかけに努める。
- ・生徒指導委員会（いじめ防止推進委員会）を毎週開催し、現状の把握・問題の協議や具体的な指導方針を決定し、組織の機能を生かした生徒指導を推進する。

② 自ら判断し、行動し、その結果に責任をもてる生徒の育成に努める。

- ・授業や各種行事等を通して、自ら判断させる機会を設定し、生徒の主体性を育てながら適切な判断力を養う。

(2) 今年度の努力点

① 授業中における生徒指導の充実に努める。

② 道徳や学級活動を充実させ、心豊かな生徒の育成に努める。

③ いじめや不登校の未然防止・早期解決に努める。

④ 家庭や地域社会との連携に努める。

3 具体的な取組

(1) 組織的な生徒指導の推進

① 生徒指導主事のリーダーシップによる全校体制の生徒指導の推進

生徒指導主事を2年程度で交替し前任者が副主事として補佐するようにすることで、全校体制の生徒指導の実現と生徒指導主事の育成を図れるようにした。また、各学年の生徒指導担当が、常に学年職員等からの情報を把握するとともに生徒指導委員会の協議内容を確実に伝達することを徹底し、全職員一致の生徒指導の実現を図っている。

② 教育相談主任、スクールカウンセラーが参加する定期的な生徒指導委員会の実施

生徒の状況を多面的・多角的に把握し、より適切な対応がとれるようするため、教育相談主任(本校では養護教諭)とスクールカウンセラーを加えて協議するようにした。

③ いじめ防止、早期発見・早期対応に向けた取組

生徒の「豊かな心」の育成とより広い人間関係の構築に向け、道徳の時間の指導の確実な実施と生徒が主体となって運営する学級活動を推進している。また、定期的なアンケート、生活ノート、チャンス相談などを通じて、生徒の人間関係の把握といじめの早期発見に努めている。1学期にはアンケートからいじめを把握し、速やかに保護者も含めた対応をすることができた。

(2) 生徒の主体性を育てる生徒会活動の推進

① 全校生徒の意見を反映し参画意識を高める計画的な生徒会活動

生徒の参画意識を高めるため、学級活動における各学級の意見を中央委員会で協議するシステムを最大限活用して、生徒会活動の実施方法等を決めるようにした。その結果、今まで学級対抗の球技大会であった「T-one 祭」を縦割りの団対抗として球技だけでなくオセロなども種目とするなど、大幅な見直しが実現した。

② 生徒会による主体的な取組や学校行事に対する提案

学校行事について、生徒会本部役員や専門部長に前年度の取組を振り返らせ、主体的な活動を展開するよう促している。今年度は、生徒会本部が自主的に「北海道胆振東部地震」への募金活動を行った。また、体育部長が運動会の入場行進を団対抗の得点種目とすることを提案し、体育主任を通じて職員の了解を得た上で生徒会本部役員と具体案をまとめて実現させた。



募金活動の様子

(3) 地域との連携の充実

① 尾瀬高等学校との連携

本校は、連携型中高一貫教育の実践校として県立尾瀬高等学校と連携した活動を行っており、1・2年生では地域への理解を深め、これからの環境や社会の在り方を考える環境学習を行っている。1年生は学校近くの森林で高校生から自然観察の基礎を学ぶ「環境講座」を、2年生は高校生とともに武尊山周辺で地域の環境の特徴や課題を考える「自然観察会」を行い、3年生の地域学習(地域活性化への提言)につなげている。これらの取組により、地域の自然を生かそうとする提言が多く見られるようになっている。

② 地域の方々との連携

生徒が課題意識をもって取り組めるよう、昨年度から3年生の地域学習の一環として、農業や商業、行政など各分野で活躍されている地域の方を招いてお話をうかがう時間を設けている。地域が直面する課題や今後の希望などを知る貴重な機会となっている。今年度は、学習のまとめとして行う提言の場にもお呼びして、指導・助言をいただく予定である。



3年生の地域学習

4 おわりに

本校のようなへき地小規模校では、生徒一人一人を理解したきめ細かい指導ができる反面、生徒は何事においても教師に依存し、教師も生徒の素直さに頼って従来の活動を踏襲する傾向がある。しかし、過疎化と少子高齢化が大きな課題となっている今、郷土の歴史や風土を大切にしながら自分たちの将来を見据え、たくましく未来を切り拓く子どもたちを育てていくことが、へき地校に勤務する我々の使命であると考えている。今後も、子どもたちのもつエネルギーの大きさを信じ、その意欲と発想を最大限に生かす教育を、全職員で組織的・計画的に行っていきたい。

第 2 部

へき地学校教員研修のあゆみ



群馬県へき地教育研究大会 高山小学校



群馬県へき地教育研究大会 高山中学校

へき地学校教員研修の様子



全国へき地教育研究大会京都大会



群馬県へき地教育研究大会
授業研究会

I 平成30年度へき地学校教員研修の概要

群馬県へき地教育研究連盟研究部長

東吾妻町立坂上小学校長 尾澤 順子

1 平成30年度へき地学校

平成30年度の県内へき地学校は、昨年度とかわりなく加盟校32校で、県内全体の6.8%である。昨年度に比べ、児童生徒数は95名減で2590名、教職員数は6名増で408名である。へき地学校の児童生徒の占める割合は、県内全体の小学校・中学校とも1.7%となった。

県へき地教育研究連盟としては、へき地の学校の小規模の利点や、地域との密接な連携を生かすとともに、子どもたちに少人数であっても、物怖じしない「たくましく生きる力」を身に付ける教育を推進してきた。

2 活動方針

- (1) 研究主題 「ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成」
～へき地・小規模・複式学級を有する学校の特性を生かした
学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～
- (2) 活動方針
 - ① 本連盟は、群馬県教育委員会、市町村教育委員会、へき地教育振興会等と連携を密にし、へき地教育の充実・発展に努める。
 - ② 本連盟に総務・調査・研究部を置き、広報活動・研究事業の推進、研究成果の収録・発行等を実施する。
 - ③ 本連盟は諸活動を通して、へき地学校教職員の連帯や親睦、指導力の向上、教育の諸条件改善等に努め、へき地教育の一層の充実を図る。
- (3) 活動内容
 - ① へき地関係教育諸情報の伝達及びへき地教育についての理解を深めるため、広報「県へき連」を発行する。
 - ② へき地教育研究大会を、群馬県教育委員会及び群馬県へき地教育振興会と共同開催し、へき地学校における経営・指導上の諸課題について研究協議し、へき地教育の充実・振興に資するとともに、へき地学校教員の指導力の向上を図る。
 - ③ 群馬県教育委員会及び群馬県へき地教育振興会と連携・協力し、へき地教育の諸課題と研究実践を収録した「板木」を継続発行し、へき地教育の充実と発展に努める。

3 研究・研修の概要

- (1) 平成30年度関東甲信越へき地教育研究協議会、8月10日（金）、栃木県ホテルニューイタヤ、栃木県へき地教育研究連盟主幹にて実施。各県代表等31名参加。
- (2) 第67回全国へき地教育研究大会京都大会、10月11日（木）・12日（金）、群馬から8名参加、京都府（1日目：ロームシアター京都みやこめっせ 2日目：京都府内7地区8会場）
- (3) 第67回群馬県へき地教育研究大会、11月2日（金）、Bブロック（吾妻）で開催、高山村いぶき会館・高山村立高山中学校・高山村立高山小学校を会場に84名参加。
- (4) 全国へき地教育研究連盟第44回研究推進協議会、11月29日（木）・30日（金）、国立オリンピック記念青少年総合センター、研究部長参加。
- (5) 広報「県へき連」第84、85号発行
- (6) 群馬県へき地教育研究資料「板木」第67集発行

II 第67回群馬県へき地教育研究大会

〈1〉概要

群馬県へき地教育研究連盟研究部長

東吾妻町立坂上小学校長 **尾澤 順子**

- 趣 旨** へき地学校の経営実践や授業実践についての研究協議を通して、群馬県へき地教育の改善・充実に資する。
- テーマ** ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成
～へき地・小規模・複式学級を有する学校の特性を生かした
学校・学級経営と学習指導の深化・充実にめざして～
- 期 日** 平成30年11月2日（金）
- 会 場** 高山村いぶき会館（全体会）
高山村立高山小学校・高山村立高山中学校（公開授業）

5 日 程

9:00 9:50 10:20 10:40 10:50 12:00 13:15 13:50(小) 14:35
13:35(中) 14:25 14:55 16:15

午前 受付	開会行事	全体会	移 動	班別研究協議	昼食 休憩	午後 受付	公開授業	移 動	授業研究会
----------	------	-----	--------	--------	----------	----------	------	--------	-------

- 全体会** 全へき連、関ブロ、県へき連報告確認等 県へき連理事長 角田 栄寿

7 班別研究協議

- 提 案** 小学校班 高崎市立倉渕小学校長 小池 政一
中学校班 片品村立片品中学校長 雲越 誠司

(2) 研究協議

班	司 会	記 録	世話係	指導助言	会 場
小学校	根岸 勝良 (上野小校長)	萩原 孝志 (細野小校長)	黒澤 守 (万場小校長)	高橋 智美 (西部教育事務所指導主事)	多目的ホール (いぶき会館)
中学校	本多 和恵 (藤原中校長)	瀧間 京子 (多那中校長)	登坂 一彦 (利根中校長)	吉野 康弘 (利根教育事務所指導主事)	3階会議室 (いぶき会館)

8 公開授業ならびに授業研究会

(1) 公開授業

小学校：高山村立高山小学校 中学校：高山村立高山中学校

学 年	教 科	単元・題材名	指 導 者	会 場
小学3年	理 科	「ものの重さを調べよう」	谷川 篤	小3年教室
小学6年	学級活動	「地域のためにできることを考えよう」	須藤 義昭	小6年教室
中学1年	国語科	「今に生きる言葉」	佐藤 圭介	中1A教室
中学2年	理 科	天気とその変化「大気の動きと日本の変化」	奈良 達也	中第2理科室
中学3年	英語科	Unit5「Living with Robots-For or Against」	剣持 裕行	中LL教室

(2) 授業研究会

学年	教科	司 会	記 録	指導助言者	会場
小学3年	理 科	丸山 三美 (草津小校長)	市川 真人 (高山小教諭)	吉野 康弘 (利根教育事務所指導主事)	プレイルーム
小学6年	学級活動	山本 徳幸 (西部小校長)	大竹 恵 (高山小教諭)	高橋 智美 (西部教育事務所指導主事)	少人数教室2
中学1年	国語科	埴田 栄一 (長野原西中校長)	竹和誠一郎 (高山中教諭)	朝比奈幾哉 (吾妻教育事務所指導主事)	多目的教室
中学2年	理 科	中沢 博 (六合中校長)	宮下 昌志 (高山中教諭)	高橋 学 (義務教育課指導主事)	第1理科室
中学3年	英語科	大竹 康史 (義務教育課)	宮崎 瞳 (高山中教諭)	村田 政人 (吾妻教育事務所指導主事)	視聴覚教室

〈2〉提案趣旨

《小学校班》

互いの個性を認め合い、高め合う児童の育成

－英語村留学生の受け入れを通して－

高崎市立倉渕小学校長 小池 政一

1 学校の概要

本校は高崎市の北西、榛名山の西麓に位置する人口約3,500人の農山村、高崎市倉渕町にある一町一校の小学校である。町内にあった3小学校、倉渕東小、川浦小、倉渕中央小が統合され、倉渕中央小の校舎を活用して、平成23年4月、本校は開校した。

今年度で開校8年目を迎える。今年度4月、旧川浦小の敷地に山村留学施設「くらぶち英語村」がオープンし、県内外から15名（上表参照）の児童を受け入れ、全校児童135名7学級で、平成30年度をスタートした。

平成30年度 英語村児童の内訳

学年	2年	3年	4年	5年	6年	人数
男子	1	3	2	1	1	8
女子			1	4	2	7
転出元	前橋	神奈川2 千葉	東京2 神奈川	東京2 神奈川 長野 広島	東京 埼玉 千葉	

2 実践の概要

(1) 研究主題設定の理由

本校児童は純朴で素直である。また、友達に対してたいへん優しい児童が多い。反面、友達に言わなければならないことも、遠慮して黙ってしまう面がある。幼稚園から同一集団で過ごすことが多いことも影響してか、人に合わせ、自分の個性を抑え、自分の考えをあまり主張しない傾向がある。本年度から英語村留学児童を受け入れることになった。英語村留学期間は原則1年となっているが、友達関係が固定化された集団の中に、転入生が入ることで、新たな刺激となってほしい。そして、英語村留学児童と本町で育ってきた児童が、互いに学び合い高め合える関係となり、共に成長し、充実した時間を共有してほしいと、教師も保護者も願った。

一方、新学習指導要領では、「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示され、互いの個性を尊重し合い、協働できる力を育てることが求められている。

以上から、英語村留学児童の受け入れを好機と捉え、互いの個性を尊重し合うと共に、自分の考えも積極的に表現し、互いに影響し合いながら共に成長しようとする児童を育てたいと願い、本主題を設定した。

(2) 実践の内容

倉渕小にとっても、英語村にとっても、倉渕の地域にとってもメリットとなる次のような活動を学校経営の努力点に意図的に盛り込み教育実践を行おうと考えた。

①倉渕からあげるもの

○自然の豊かさ・・・「大明神山レク」と称し、町内の道祖神や史跡・大明神山を巡るコースを縦割り班で散策した。また、林業体験（6年）、稲づくり（5年）、愛鳥学習（4年）、自然観察会（3年）等を行う中で自然体験の中で自然の豊かさを理解させた。

○優しさ・温かさ・・・良いところ探しの活動を各学級で行ったり、相手の気持ちを受け止める傾聴の実習を保健委員会でしたりすることで、学級・学校全体で優しさ・温かさを広げる活動に取り組んだ。7月、12月を人権学習強化月間と位置づけ、人権標語の作成、人権

作文の作成に取り組んでいる。9月に「ありがとう月間」を位置づけ、敬老の日を前に、祖父母へ感謝のメッセージを書いた絵片を地域の温泉に浮かべる「ありがとう風呂」の活動や、「ありがとう川柳」を作成することで、身の回りの人へ感謝の気持ちを表す活動にも取り組んできた。

- 協力する楽しさ…運動会の競技では縦割り班を核とする団対抗で行ったり、日々の清掃を縦割り班で行ったりするなど、異年齢で協力する楽しさを味わわせるようにした。

②英語村から学ぶもの

- 積極性・表現力…進んで挙手したり、多勢の中で発言したりすることを厭わない英語村の児童から刺激を得ることで、児童の表現力の向上を図るようにした。
- コミュニケーション力…月曜放課後に英語活動の時間を設定（倉渕小チャレンジスクール）し、英語村の外国人スタッフや地域のボランティアの協力を得て、児童のコミュニケーション力を高めるようにした。
- 英語村の生活から学ぶ…PTA セミナーとして、英語村を運営している「山村留学育てる会」の代表から、英語村の理念を講演してもらったり、PTA 主催の英語村見学会を設定したりして、英語村と保護者との交流を図った。今後、英語村児童の登校している4kmの道のりを歩く体験や宿泊体験（PTA 主催）をすることで、本校の保護者や児童が英語村の生活の一端を理解できるようにする。英語村からの好影響が見られるところを学校日より等で積極的に発信することで、保護者や地域の理解を一層深めるようにした。

③共に学ぶもの

- 道徳の授業改善…昨年度より校内研修で道徳科を取り上げ、高崎市研究指定校「特色ある学校」及び「道徳教育総合支援事業指定校」を受け、授業改善に取り組んできた。『考え・議論する授業づくり』をテーマとし、発問の工夫、考えを積極的に交流する展開の工夫、「道徳ノート」を活用した評価に視点を当てて、授業研究に取り組んできた。
- 英語活動の充実…倉渕中学校加配の英語専科の教師に高学年英語科、中学年英語活動の授業を担当してもらい、小中連携した英語のスキルアップとコミュニケーション力の向上に取り組んできた。また、校内の階段や壁に英単語を表示したり、英語の掲示板を設置したりして、児童が英語に親しめるような環境づくりにも取り組んできた。
- エキスパートから学ぶ…ジャイアンツアカデミー校長の倉俣徹氏より投げ方指導を、元水泳オリンピック選手の内田翔氏より水泳指導を受けた。今後、育英高校野球部の荒井直樹氏より、5・6年及び保護者対象に講演をしていただく予定となっている。

3 まとめと今後の課題

英語村の児童が学級に入ることによって、全体的に積極性が伸びてきており、発言力や表現力も高まってきた。また、英語の授業や放課後学習を通して、外国人スタッフや本校ALTのネイティブな英語に触れる機会が増え、聞き取る力はもちろん、発語力も向上してきている。

一方、英語村児童は英語活動や授業、学校行事等でも活躍の機会が多く得られたことにより、一目置かれる喜びを感じている。また、保護者や地域に、英語村から得るメリット等を発信したことで、英語村を支援しようという雰囲気醸成されてきたことも成果の一つである。

課題としては、英語村の生活のよさを取り入れるという点で、英語村のテレビ・ゲームなしのノーメディア生活を倉渕の家庭にも取り入れたいと考えていたが、未だ不十分であった。また、親元を離れ、寂しい思いをするであろう英語村児童に、できるだけ寄り添う指導を心がけてきたが十分でない。スクールカウンセラー等の積極的な活用を図り、心のサポートをさらに強化していく必要がある。

《中学校班》

広い視野をもち、片品の未来を創る生徒の育成

～片品学を核として～

片品村立片品中学校長 雲越 誠司

1 学校の概要

本校は利根郡片品村の中心部の鎌田地区に位置している。昭和22年に開校し、翌23年1月には火災により校舎を失った。しかし村民の教育への思いは強く、その年の11月26日には新校舎が完成した。昭和50年に現在地に移転。そして現在、新校舎の建設が進められ、12月に完成する予定である。

校区は広く、4小学校からの卒業児童を受け入れていたが、平成28年に片品小学校1校に統合されたことを機に、スクールバス11台が小中学生の通学に導入され、学校所在地である鎌田地区以外の生徒は、全員これを利用している。

本年度の生徒数102名、学級数6（1年2学級、2年1学級、3年2学級、特別支援1学級）である。しかし、来年度は生徒数89名となり、開校以来初めて二ケタの生徒数となるとともに、学級数が4となり、大幅に職員数も減ることになる。

2 実践の概要

(1) 研究主題設定の理由

地域と学校は運命共同体であり、地域の衰退は学校の衰退へとつながる。しかし、ただそれをじっと受け入れるだけでなく、学校が将来の地域の発展に向けて種を蒔くことができれば、状況も変わってくるものとする。へき地出身であり、また数度のへき地校での勤務経験をもつ私としては、昨今の社会情勢・地域の実状を考えた時、これからの社会においては「グローバルに考えローカルに活動する、グローバル人材の育成」が必要になるのではないかと常々考えていた。

本年度、片品中学校に校長として赴任するに当たり、この考えの下、学校経営方針として「広い視野をもち、片品の未来を創る生徒の育成」を掲げることにした。そして目指す生徒像を「自分自慢、片中自慢、片品自慢のできる生徒」とした。「自分自慢」とは、生徒が学力・心力・体力を付ける中で自己肯定感をもち、社会に通用する力を身に付けていくことを表したものである。「片中自慢」とは、生徒がお互いを認め合える人間関係をつくる中で自己肯定感を自己有用感へと高め、自分が片品中学校・片品村に必要な人間であることを自覚するとともに、生涯にわたる縦横の人間関係を築いていくことを表したものである。「片品自慢」とは、生徒が地域を知り愛着をもつ中で、自分を地域で活かし、片品の未来を創っていくことを表したものである。

本稿においては、「片品自慢のできる生徒」の育成のために実践している「片品学」について紹介することとする。

(2) 実践の内容

① 「片品学」と「片品博物館」について

総合的な学習の時間を中心に、片品の自然・歴史・風習・民俗・人物など、全てのものを学習対象とする学びを「片品学」として実践する。そのために片品村全体をまるごと「片品博物館」と想定し、地域の方全員を学芸員、職員を企画・広報係と見立てて、「片品学」実践の場とする。

② 「片品学」の広報活動

「片品学」を実践していくに当たり、「片品学」と「片品博物館の考え方」について、広報していく必要があった。まず職員に対しては、最初の職員会議で学校経営方針の一つとして説明した。また、生徒・保護者に対しては、校長通信第2号で、「片品学」「片品博物館の考え方」について説明するとともに、具体例として「校長の片品学その1」を掲載した。また、PTA新聞に「片品博物館で片品学を」と題した挨拶文を掲載し、保護者及び祖父母への協力も募った。地域の方に対しては、学校評議員会をはじめとした会議の場で説明させていただいた。

ただ、説明しても具体的なイメージを捉えられないことから、イメージ作りの手立てとして校長通信に「校長の片品学」を連載している。9月末までに21編を掲載し、その内容は、「尾瀬氏はいたのか?」「寄居山城」「古仲城」「復興碑」「八角堂」「根羽沢鉦山」「丸沼ダム」「北原砦」「対髑髏」「神戦伝説」などで、全て調査と取材に基づいて書いたものである。また、「片品の義経伝説」「以仁王の逃避行」「白根火山」「檜枝岐村との交流」「片品の潜伏キリシタン」など、約60編を現時点でストックしているので、順次掲載していく。

③ 学校における「片品学」の実践

本校の総合的な学習の時間では、1年生「片品を知る」、2年生「片品を探る」、3年生「片品を提案する」がテーマになっている。まさに「片品学」そのものであると言える。

1年生では、主に村内の文化財等を事前に調べ、実際に巡って学ぶ「村巡り」、そして尾瀬高等学校自然環境科の生徒の指導の下、学校周辺の自然を観察する「中高環境講座」を通して、「片品を知る」こととなる。2年生では、主に片品村にある事業所で仕事を体験する「職業体験学習」、そして尾瀬高生の指導による武尊山での「中高自然観察会」を通して、「片品を探る」こととなる。3年生では、主に至仏山に登る「尾瀬学校」、そして全員が片品村議会で質問を行う「中学生議会」を通して、「片品を提案する」こととなる。

また、「片中文化の日」には「弟子入り講座」を開講し、「料理」や「写真」、「切り絵」など、全10講座で片品村のその道の達人たちに教を請うことになっている。

その他、授業にも地域素材を取り入れた実践が行われている。例えば国語では、尾瀬学校で感じた自然を俳句にし、片品村俳句協会の方を講師に迎えて推敲を行い尾瀬俳句大会に投句したり、古典の学習で学んだことを活用して、片品の名所を擬古文で紹介したりしている。また英語では、片品村を訪れた外国人観光客に対しての片品紹介ポスターの作成を通しての学習が行われている。

3 まとめと今後の課題

「片品学」は、今年度始まったばかりである。そこで、生徒・保護者・職員・地域の方にイメージをもってもらうことを主眼に取り組んできた。

「片品学」の学習対象は片品村に関するもの全て、「片品学」の学習の場は片品村全体であるため、学校での学びだけには留まっていない。地域の行事の中での学びも、家庭で行われる年中行事での学びも、日常の生徒のちょっとした気付きも「片品学」の範疇となる。今後、それらの全てを集約した概念図的なものを作成し、「片品学」のイメージをはっきりさせていきたいと考える。

平成13年度から藤原中学校において、「藤原学」を創設し実践した経験がある。その際、生徒の活動をきっかけに、地域の方が2本の遊歩道を整備した。現在は夏場のトレッキングコース、冬場のスノーシューコースとして観光資源の一つとなっている。「片品学」が、このような地域を巻き込んだ方向に発展していくことを期待しつつ、その実践を通して「地域を知り愛着をもつ中で、自分を地域で活かし、片品の未来を創っていくことができる生徒」を育てていきたい。

〈3〉公開授業・授業研究会 《高山村立高山小学校》

1 研究主題

自分の思いや考えを持ち、表現できる児童の育成
—読解力を高める指導法の工夫・改善を通して—

2 公開授業及び成果と課題

① 第3学年（理科） 指導者 谷川 篤

— 授業の視点 —

実験結果の予想やその理由を伝え合うことで、見通しを持ち、より主体的に実験に取り組み、重さは変わらないことを理解させることに有効であったか。

〈本時のねらい〉

はかりを使って物の重さを比べる活動を通して、物は形が変わっても重さは変わらないことを理解する。

〈展開〉

過程	学習活動 ・予想される児童の反応	時間	指導上の留意点及び支援 ○教師の願い ◎児童への支援 ◇評価
つかむ	1 本時のめあてを知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">・形を変えると、ものの重さは変わるでしょうか。</div> ・形を変えて調べてみたい。	5分	○前時の学習を振り返り、はかりの使い方を確認する。 ○本時の学習は、物の形と重さの関係を調べることであることを、ワークシートに記入させながら確認させる。 ◎粘土など具体物を提示して、児童が予想しやすくする。
追求する	2 物の重さが変わるか予想する。 ・物の重さは、形が変わると軽くなると思う。 ・変わらないと思う。 ・今はわからない。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"><div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">○</div><div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">—</div></div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"><div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">□</div><div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">○ ○ ○ ○</div></div>	10分	◎ワークシートに自分の考えを書かせ、考えをまとめやすくする。 ○調べる方法を絵に描かせて具体化させる。 ○個人で考えた後、グループで調べる形を決めさせる。(案が多すぎた場合は、5つまでとする。) ○グループ内で形を決めた理由や重さが変わる理由等意見交換させる。 ○自分の予想とその理由をグループ内で伝え合うことで、自分の考えをより明確にさせる。 ○物を小さく分ける考えが児童から出ない場合は、分けた場合どうなるか問いかけながら追求を促す。 ◇(思・表) 実験結果を予想し、自分の考えを表

<p>3 物の重さを調べる実験をし、結果から考察をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どの形も重さが同じになった。 ・1つだけ重さが違う。 ・ちょっとだけ軽くなった。 	<p>15分</p>	<p>現している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○グループごとに粘土を用いた実験をする。形を変えたときの重さと、粘土を小さく分けたときの重さをはかりを使って調べさせる。 ○形と重さの同じ粘土を用意しておく。 ◎表に整理させて、それぞれの結果を比べやすくする。 ◎粘土が板についたり、爪に入ったりして重さが変わることが考えられるので、あらかじめ児童に注意しておく。 ○必要に応じて机間指導していく。(はかりが水平であるか、粘土が落ちていないか等確認する。
<p>4 実験結果を発表する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>・調べた結果から、どんなことがわかりますか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・形を変えても、分けても重さは変わらない。 ・重さが変わったのは、粘土が板についてしまったから。 ・実験の途中で粘土が落ちてしまったから重さが変わってしまった。 	<p>10分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○グループごとに結果を発表させ、意見交換させる。 ○結果が違ってしまった場合、理由を児童に考えさせる。 ○全グループの結果を黒板に掲示し、どの結果も同じであることを確認できるようにする。 ◇(思・表) 実験結果を考察し、自分の考えを表現している。
<p>ま と め る</p> <p>5 本時のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アルミニウム箔でも、形が変わっても重さは変わらない。 	<p>5分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○児童に考察を発表させる。 ◎考察の仕方を例として示し、結果から考察ができるようにする。 ○アルミニウム箔を使った演示実験をし、本時の学習の確認をする。 ◇(知・理) 物は、形が変わっても重さは変わらないことを理解している。

<成果>

- 学習活動が体験的な活動や日常生活と関連が図れており、子どもたちが興味・関心を持って取り組むことができた。
- 予想、方法、実験、考察という流れで授業が構成されており、子どもたちも見通しを持って学習に取り組んでいた。

<課題>

- グループの話し合いや発表の仕方のルールなどを明確にする必要がある。
- 予想と結果を照らし合わせて考察させることが大切である。
- 予想の理由をより多く出させることで児童の考えを明確にする必要がある。

② 第6学年（学級活動） 指導者 須藤 義昭

授業の視点

話し合い活動において、他者の意見を大切にしながら自分の考えを深め、根拠に基づく思考・判断を通して、自分の意見を発表することができているか。

<議題> 「地域のためにできることを考えよう。」

<本時のねらい>

地域のためにできることを考え、学級全体で取り組めることを決定し実践への見通しを持つ。

<展開>

学習活動 ・予想される児童の反応	時間	指導上の留意点及び支援・評価 ◇評価
1 議題、提案理由の確認を行う。 (1) 議題の確認をする。	5分	○話し合いに向けた意識を促すために、議題や提案理由、めあての確認を行う。
議題：地域のためにできることを考えよう。		
(2) 提案理由の確認をする。 (3) めあて、決まっていること、話し合うことの確認をする。		○話し合いの必要性を感じることができるようにするため、計画委員より提案理由を発表する。 ○一人一人がめあてを理解できるように、事前にめあてをワークシートに記入する時間を設定する。
話し合いのめあて ・地域みんながうれしくなることにしよう。 ・学級のみんなでき取り組めることにしよう。〔11月9日(金)5校時予定〕		
(4) 地域のために活動する意義や目的について確認する。		○地域のために活動することの意義や目的を思い起こさせるために事前の活動内容について話をする。
2 話し合いをする。		
話し合うこと：みんなが気持ちよく生活するために学校周辺でできることを決めよう。		
(1) 出し合う ・学校のまわりのゴミ拾い。 ・安全パトロールをする。 ・お年寄りにお手紙を書く。 ・道路の落ち葉はきをする。 ・施設の人に歌をおくる。 ・施設の人とレクリエーションをする。 (2) 比べ合う ・登下校中にゴミが落ちているのを見るので、ゴミ拾いがいいです。きれいになれば、みんながうれしくなるからです。 ・落ち葉はきに賛成です。ちょうど落ち葉がたくさんあるし、ゴミ拾いと同じでみんながうれしくなります。	30分	○自分の意見に理由を付けて発表できるように、事前にワークシートに自分の意見と理由を記入させておく。 ○より良い話し合いを行うために、話し合いのルールや発言の仕方にも気を付けるよう助言する。 ○意見を比べたり合わせたりする際に、動かしやすいように、出された意見は短冊に書いて掲示するように助言する。 ○話し合いがスムーズに進行するように、司会者には司会の手引きを参考にしながら進めるように助言する。 ○出された意見を基に、より良い意見に整理・発展できるよう「なっとくシート」を参考にし比べたりつなげたりできるものを考えるよう助言する。 ○根拠に基づいた意見交換になるよう、「みんながうれしくなること」や「みんなで取り組めること」

- ・お年寄りに手紙を書くに賛成です。交流会などでお世話になったし、喜んでもらえるからです。
- ・手紙と歌をビデオに撮影してプレゼントすれば施設に行かなくて済むと思います。

(3) まとめる

- ・「くらべる」のわざを使って、ゴミ拾いがいいと思います。
- ・「つなげる」のわざを使って、ゴミ拾いと落ち葉はきがいいです。

(4) 決まったことを確認する。



というめあてを意識して発言するよう助言する。その際、「みんな」とは地域に住まう人たちだけでなく、外部の人や自分たちも含まれることに気付かせるような投げ掛けを行う。

- 「聴くこと」「認めること」について、友達の意見をきちんと聴いたり、認めたりできたことの自覚へとつながるように、次のような発言や聴く姿勢が見られた児童を賞賛する。

◇評価項目

他者の意見との異同を認識し、根拠に基づいた思考・判断が行えたことが分かる内容の発言をしている。 【思考・判断・実践】

- みんなが納得できる意見にまとめられるよう、「なっとくシート」を参考にして、理由付けができるよう助言する。その際、めあてを意識させるようにする。
- 出された意見を大切にするため、実施可能な活動については、別日を設けて取り組んでみるよう助言する。

3 振り返りをする。

本時の話合いについて、自己評価をする。教師の話を聴き、本時の話合いを振り返るとともに、今後の活動に対する意欲を持つ。

10分

- 児童が自他の考えの異同を認めたり、根拠に基づいた思考・判断を行ったりできたかを確認するために、自己評価シートを用いる。

<成果>

- 司会、書記などの役割分担ができており、計画委員が中心となって話し合うスタイルが身に付いている。
- 話し合う場面では、根拠をもとにして意見を述べたり、友達の考えに対して意見が言えたりするなど、日々の取組の成果が出ている。
- 出された意見を短冊に書いて黒板に貼る方法は、個々の意見を集団で精査していく過程において有効である。

<課題>

- 話合いの途中で、担任からの指示や説明が多く、話合いが中断される場面があったので、授業中の教師の説明等は精選する必要がある。
- 提案理由の説明については、教師が行うのではなく計画委員会に任せることで、子どもの中で必要感がより増してくるものと考えられる。

《高山村立高山中学校》

1 研究主題

生徒が主体的に学ぶ授業づくり

～生徒が進んで追究し、共に解決する課題設定の工夫を通して～

2 授業公開及び成果と課題

① 第1学年（国語） 指導者 佐藤 圭介

授業改善の視点

故事成語についてグループで調べ合う場面において、故事成語にまつわる経験や考えを共有し合えば、故事や古典への関心が高まり、古典へ親しむことにつながるだろう。

〈单元名〉 「今に生きる言葉」

〈本時のねらい〉

- ・訓読の仕方を知り、「矛盾」の書き下し文を音読して、漢文特有のリズムに慣れる。
- ・故事成語が歴史的な事実をもとにした言葉であることを知る。

〈展開〉

	学習活動と内容	時間	学習活動への支援・留意点(◆) 予想される生徒の反応「 」	評価項目 と方法
つかむ	○故事成語について知っていることを発表する。	3	○故事成語について知っていることや、聞いたことがあることなどを尋ねる。 「なんとなくは聞いたことはある」 「漁夫の利は聞いたことがある」 「全く想像が付かない」 ◆意見が出ない場合は本時で扱う「矛盾」を見せて考えさせる。	
	漢文独特のリズムや言い回しに慣れ、故事成語について知ろう。 ○故事成語とは何かを知る。 ○「矛盾」を音読し、読み慣れる。 ○現代語訳と比べながら、内容を理解する。 ○教科書の「矛盾」の4コマ漫画にセリフを入れる。	1 5	○教科書を読み、生徒自身の言葉でまとめさせる。 ○正確に聞き取れるように教師の範読だけでなく、CD範読も取り入れる。 ・繰り返し読ませることで、漢文特有のリズムに慣れさせる。 CD範読→教師対生徒→生徒同士 ○重要語句を確認させる。 鬻ぐ＝売る いかん＝どうなるのか あり＝いた いはく＝言う なきなり＝ない 利なる＝鋭い 子＝あなた もつて＝～で 陥さば＝突き通すならば ○現代語訳を参考にさせながら、自分の言葉でワークシートにセリフを書き入れさせる。 ◆教科書のせりふをそのまま抜き出しても良いことを伝える。 ○セリフを書き込めた状況を確認し、グループになるよう指示する。	漢文特有の簡潔なリズムで、正確に音読している。【観察】

深める	○「矛盾」の意味を一文で書き、国語辞典の「矛盾」の意味と比較して、内容の確認をする。	○ワークシートに書いた「矛盾」の意味をグループで確認し合うことで、内容の理解を確実にさせる。 ◆グループ活動では、一人一人にセリフを発表させるとともに、発表した生徒に対し意見や感想を伝えるようにする。	
	○資料集や国語辞典などを用いて、いろいろな故事成語について調べる。 ○グループで調べたことを発表し、クラスで取り組んだことを共有する。	○グループごとに3個の故事成語を与え、それについて調べさせる。 ○それぞれの故事成語について ①聞いたことがあるか、ないか。または使ったことがあるか ②もともなったエピソードなど ③どんな場面が想像できるか 以上の観点で調べ、まとめさせる。 ◆国語辞典や資料集・タブレットを準備しておき、自由に活用して調べさせる。 ○グループで調べたことを一つずつ発表させる。 ◆机間指導しながらグループごとに発表する故事成語を選び、伝えておく。 	故事成語が歴史的な事実やエピソードをもとにした言葉であることを理解し、調べている。 【ワークシート・観察】
まとめる	○本時についての振り返りと、次時に向けての見通しを持つ。  ○次回の活動を知る。	○わかったこと、次回頑張りたいことなどの観点で振り返らせる。 ○本時で学んだこと、気付いたことについて振り返りを行い、ノートに記入させる。 「故事成語が昔の言葉であっても、今でも使われているものがあることが分かった。」 「聞いたことはあっても自分で使うことは難しく、使われる回数が少ないものもあった。」 「いはくなど、聞いたことのない言い方があった。」 ○次回、故事成語を1つ選び、それに合った、起承転結の構成に沿った文章や図、絵を書くことを伝える。	

〈成果〉

- 「めあて」「まとめ・ふりかえり」の1単位時間の流れがしっかりしていた。
- 生徒の様子を見取り、学習が進むよう配慮されていた。
- 普段の学級経営から、話し合う・学び合う環境ができていた。
- ポイントを押さえた板書や、辞書やICTの活用など力を付ける指導がされていた。

〈課題〉

- 書き下し文を読む際に、どのようなことが漢文独特のリズムなのか、説明したり考えたりする時間があると良かった。
- 「矛盾」についてしっかり深めてから、進める必要があった。
- グループにしたときに、経験を共有し合えるような手立てを用意しておく。
- 既存のグループでなく、ペアでも3人での活動が効率的か。柔軟に考えていくことが大事。
- めあての板書など手間や書く時間を省けるところは省くことで、生徒の学習時間が確保される。

② 第2学年 (理科) 指導者 奈良 達也

授業改善の視点

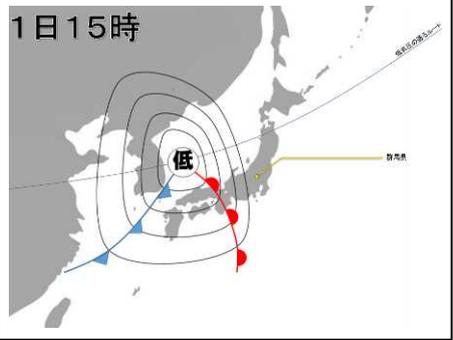
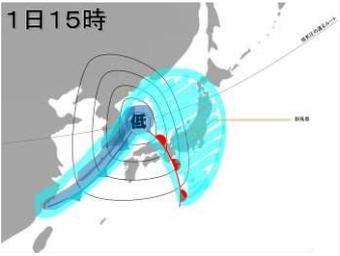
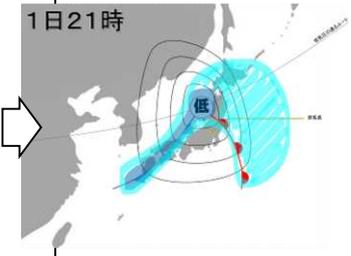
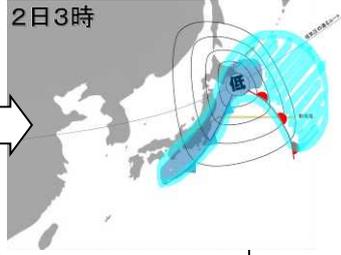
アニメーションを作ることによって天気の変化を予想させることは、気象要素の変化を前線の通過と関連付けて考察する力を高めることができるであろう。

<单元名> 『天気とその変化』 題材名 第2章「前線とそのまわりの天気の変化」

<本時のねらい>

タブレット端末を使ってアニメーションを作り、話し合う活動を通して、温帯低気圧の通過によって天気はどう変化していくのか、時間的・空間的な変化について筋道を立てて説明できるようにする。

<展開>

	学習活動	時間	学習活動への支援	評価項目と方法
つかむ	○温帯低気圧のまわりの雲の種類、天気の特徴について復習する。	10	○TVモニターを利用して手早く復習の質問ができるようにする。	
	○温帯低気圧が通過する際に天気、風向、気温がどのように変化するか予想する。 ○本時のテーマを知る		○予想段階ではあまりヒントを与えずに、感覚的に答える程度で済ませる。	
アニメーションを作って話し合い、天気や風向、気温の変化について考えよう				
追究する	○自分たちがこれからやろうとする活動のイメージをつくり、やり方を学ぶ。		○天気予報の動画を見せ、晴れ、曇り、雨の範囲が移動する様子を確認できるようにする。 ○実物投影機を使ってアニメーション作成の仕方を伝える。	
				
				

	<p>○ペアごとに iPad を使って 天気の変り変わりを示す アニメーションをつくり、動きを確認する。</p> <p>○班の中でアニメーションを公開しあい、群馬県の天気がどのように変化しているのか話し合う。</p>	30	<p>○事前にアニメーション作りのもとになる Power Point のプレゼンテーションファイルを作成しておき、生徒は iPad を使って簡単にアニメーションを作成できるようにする。例えば晴れ、曇り、雨を示す色を地図上に塗っていく作業などに限定する。</p> <p>○アニメーションが出来しだい確認させ、修正する必要がある場合は修正を行えるようにする。</p> <p>○プリントを利用し、群馬県の天気がどのように変わっていったかを書き込めるようにする。その際、天気だけでなく、風向や気温にも着目させる。</p>	<p>〈科学的な思考・表現〉 前線が通過したときの天気の変化について、科学的に考察し、判断している。 (ペアでの話合いの様子やアニメーションにあわせるセリフの様子から評価)</p>
まとめ	<p>○班ごとにプリントに記入した低気圧の通過と天気の変化について、全体でまとめる。</p> <p>○次回、天気予報をイメージした動画を撮影するので、その役割分担とセリフづくりを考える。</p>	10	<p>○作業の終了を明確にさせ、全体で学習内容の確認ができる時間をとる。この時間で本時の学習の振り返りができるようにする。</p>	

<成果>

- 説明にパワーポイントを用いていたためスムーズだった。
- アニメーション作りという活動により活発な授業になり、生徒たちが意欲的に学習に取り組むことができた。
- ICT の活用によりアニメーションで時間的な変化を実感させることができた。
- 指での色塗り作業の連続が学力の定着に役立った。また、低気圧の移動によって天気の変化することに気付くことができた。
- 生徒はタブレット端末の利用に慣れていて、調べ学習にも有効活用できる。
- TV での気象予報を紹介したことで日常生活に結び付けることができた。
- 機材をそろえやすいという利点を生かすことができた。

<課題>

- 各自に考えをもたせる自力解決の時間があるとよかった。
- 学習プリントに「なぜそうなるのか」と根拠を書く欄があるとよかった。
- 答えを当てにいくよりは、自分の考えを言えることが大事だと思う。
- 課題提示の仕方を、例えば「お天気キャスターになろう」などとシンプルなものにするとよい。また、そのことを早めに伝えることによって生徒は見通しをもって取り組むことができる。それが主体的な取組につながっていくだろう。
- 主体的、対話的で深い学びにつなげるために、理科の見方・考え方をはたらかせて問題解決に取り組む授業展開を今後も続けていけるとよい。

③ 第3学年（英語） 指導者 剣持 裕行

授業改善の視点

中心活動において、次々と相手を変えて「ロボットと暮らすことについて賛成か反対か主張する」という言語活動を行えば、生徒は討論に使える様々な語彙や文法、考え方を学ぶことができるであろう。

<単元名> Unit5: Living with Robots—For or Against (NEW HORIZON English Course3)

<ねらい> ロボットとの暮らしについて、友達と会話する活動を通じて考えを深め、ロボットと暮らすことに賛成か反対か主張できるようになる。

<展開>

学習活動（分） ○：留意点 点線囲：評価 ☆：振り返りの生徒の意識

1 前時までの学習内容を復習する。（15分）

① Word Counter (Today's Topic: What robot do you want?)

○ タブレット端末でロボットの例を見せることで、何について話し合うのか具体的に想起させる。

○ 教諭・ALT のデモンストレーションを行う。

② 復習

○ ピクチャーカードを見せて、前時の内容を想起させる。



2 本時のめあてをつかむ。（5分）

○ タブレット端末でロボットの利点や課題を投げかける。

○ 教諭・ALT のデモンストレーションの中で、賛成・反対表現や理由を例示し、めあてにつなげる。

めあて ロボットと暮らすことについて、賛成か反対か意見を述べよう

3 ロボットと暮らすことについて賛成か反対か、ペアで意見を交換する。（15分）

○ ワークシートで賛成・反対表現、理由を述べる表現を確認する。

○ 教諭・ALT のデモンストレーションを行う。

○ 個別で考える時間を1分取ってからペアで意見を交換する。

その際、黒板に会話例を板書しておく。

○ 1分間でペアを換え、色々な意見を聞けるようにする。

○ 意見交換の途中で、使える語彙や参考になる意見を全体にその都度紹介していく。



評価：賛成か反対か自分の立場を明確にし、理由まで述べる事ができている。

注：新学習指導要領<観察・ワークシート（2）イ・ウ>

4 友達の意見を参考にして、改めて自分の立場と理由をワークシートに記入する。（10分）

○ 理由が書けない生徒には、ペアワーク時に板書した語彙や表現を示し、参考にさせる。

○ 記入後、賛成、反対それぞれの立場の生徒を数名ずつ指名して意見を全体に発表させる。

5 本時のまとめ・振り返りをする。(5分)

○振り返りシートに、本時でできるようになったこと(言語面)やわかったこと(内容面)を書かせる。

☆ロボットと暮らすことについて、理由を述べながら賛成することができた。(言語面)

☆意見交換の中で、ロボットは便利だが、危険性もあるとわかった。(内容面)

<板書計画>

5-1 Starting Out **Today's Goal** ロボットと暮らすことについて、賛成か反対か意見を述べよう。

Today's Topic

"Living with Robots"

What robot do you want?	I agree because...	useful help make us happy
	I disagree because...	dangerous scary we cannot control

<実践の成果と課題>

今年度、本校は「4技能スキルアップ研修」の指定を受け、技能の統合的な学習について学び、実践してきた。4技能スキルアップ研修に関わり、本年度から主に取り組んだり、新たに試みたりしてきた実践は、以下の3項目である。

① 4技能統合型の授業

技能統合には、大きく分けると「聞いて応答する」「聞いたことを説明する」「読んだり聞いたりしたことについて賛成や反対など考えを話す・書く」の3つがある。この3つを意識して言語活動を設定するようにした。また、生徒が伝えたい、聞きたいと思うような話題・内容を設定するよう心がけた。この活動をするようになって、生徒の言語活動の意欲が非常に高まり、話したり書いたりする内容も充実するようになってきた。下位の生徒でも安心して言語活動に取り組めるような支援を充実させることが今後の課題である。



② 単元構想

教科書で指定されているから学習するのではなく、大きな一つの最終目標を達成するために学習しているという意識を生徒に与えるためには、単元構想が不可欠である。新しい単元に入った最初の時間は、単元の最終目標を示し、その目標を達成するためにはどんな力を身に付けていくのか示すように心がけた。学ぶことの必要性を感じさせることで、生徒からも「こう言いたいのだが、どう表現すればよいか」といった質問が出てくるようになった。

③ 振り返り

振り返りシートを作成し、毎時間記入させた。授業終わりに1時間の振り返りをすることで、改めてめあてを思い返し、本時は何を学べばよかったのか、その目標を達成できたのかを確認できるという有用性ととも、一つの単元が終わった際に、どれだけ新しい知識や技能を身に付けられたか積み重ねを振り返ることができる。また、振り返りシートを作成することで、教師側も単元構想をしっかりと考えることにつながり、目指す生徒像を意識した授業につながる。

Ⅲ 第67回全国へき地教育研究大会（京都大会）

〈1〉概要報告

草津町立草津中学校長 角田 栄寿

第67回全国へき地教育研究大会が、文部科学省、京都府教育委員会、全国へき地教育研究連盟等の主催により、平成30年10月11日(木)～12日(金)の2日間にわたって京都市を中心に開催された。さらに本大会は、第33回近畿へき地教育研究大会京都大会、第8回京都府へき地・小規模校教育研究大会としての位置付けでもあった。群馬県からは指導主事1名、校長7名に、全へき連第25代会長の吉野隆哉様(現片品村教育長)を加えた9名が参加した。

◇大会前日(10月10日)「全国へき地教育研究連盟秋季総会」及び「交流会」

平成30年度秋季総会が、10月10日(水)15:00よりロームシアター京都にて開催された。本総会においては、柿崎秀顕：全国へき地教育研究連盟会長より全国的にへき地・小規模校の学校数が減少しており、組織強化に向けた取組の重要性が強調された。また、富谷祥彦：広報部長より「へき地教育新聞」の廃刊と全へき連ホームページのリニューアル等の報告があった。

総会終了後、会場を京都東急ホテルに移して、交流会が開催された。全国各地のへき地校勤務の先生方との有意義な情報交換ができた。

◇大会第1日(10月11日)「全体会・分散会」

全体会開会式は、角田泰志：京都大会実行委員長の開会の言葉に続き、国歌及びへき地教師の歌「太陽となろう」を斉唱し、主催者として、文部科学省初等中等教育局主任視学官、京都府教育委員会教育長、京都市教育長、全国へき地教育研究連盟会長の挨拶があり、京都府知事、京都市長から来賓代表の祝辞があった。

基調報告では、まず古田統：全国へき地教育研究連盟研究部長から、第8次長期5か年研究推進計画(平成26～30年)の概要説明があり、今年度が最終年度であり、京都大会の意義について説明があった。続いて西村雅司：京都大会研究部長から京都府の取組に関する報告がなされた。

記念講演は、「ふるさとで学ぶことの教育効果について ～新学習指導要領に対応した学びの力をどう深めるか～」と題して、佛教大学教育学部教授である原清治氏の講演があった。最近の一部の大学生の実態や子どもたちの人間関係についての説明や、へき地教育のよい点・へき地教育の課題、教師のへき地への認識を変えることの必要性などの話があった。

講演終了後、次年度開催地である小林亨：長野県大会実行委員長の挨拶や分科会場の紹介、大会旗の引継が行われ、全体会を終了した。

アトラクションは、山国隊軍楽保存会、京都市立京北第二小学校児童、京都市立周山中学校生徒、京都府立北桑田高等学校生徒による「維新勤王隊列」が披露された。

午後は、会場をロームシアター京都、隣接するみやこめっせの2会場に分け、全国第8次長期5か年研究推進計画研究課題別に課題1から課題6までの6つの分散会に分かれ、それぞれ2校(全国ブロック1校、近畿ブロック1校)の発表をもとに活発な研究協議が行われた。

◇大会第2日(10月12日)「授業公開・分科会」

2日目は、京都府下9小中学校(A宇治市立笠取小学校、B京都市立花背小中学校、C京都市立宕陰小中学校、D亀岡市立畑野小学校、E南丹市立美山小学校、F綾部市立上林小・中学校、G伊根町立伊根小学校、H伊根町立伊根中学校、I京丹后市立宇川小学校)で授業が公開され、その後A～Iの8分科会(G、Hが合同開催)で、開会式、各学校(地域)の研究発表及び研究協議、閉会式が行われた。

〈2〉 分科会報告

A分科会

深く学び、自己変革を楽しむ児童の育成

～気づきの質を高め、探究心を育てる授業をめざして～

高崎市立宮沢小学校長 中町 文彦

1 会場校 宇治市立笠取小学校（学級数4 児童数19名 職員数7名）

2 地域・学校の概要

笠取地区は平等院や宇治茶で知られる宇治市北東部の山間部に位置している。周囲には西国巡礼の寺院も点在し、京都市・滋賀県大津市と隣接する歴史に彩られた地域である。本校は明治6年に開校し、今年で創立146年目を迎える伝統のある学校であるが、急速な過疎化により、地元児童が減少した。そこで、平成13年度から小規模特認校制度を敷き校区外から入学児童を募集している。今年度在籍19名のうち、16名が市街地よりスクールバスにて通学している。

3 研究の概要

(1) 研究の内容

生活科と総合的な学習の時間を中心に、学校周辺の豊かな自然の中で体験的に見いだした学習課題について、主体的、対話的に学びながら探究的な見方・考え方を働かせる学習を進めている。また、6年間の学びの過程を【低学年（気付く）】・【中学年（つなげる）】・【高学年（ひろげる）】の3段階に分け、それぞれの学びの姿に焦点を当てて学習活動を展開させている。

研究仮説

- 仮説① 身近な自然や文化と触れ合う中で気づきを、「存在への気づき」から、個々のつながり・広がり、さらに人間の生き方との関わりなどの「関係への気づき」へと質を高めることで、深い学びを促し、児童が自己変革を楽しむことになるであろう。
- 仮説② 身近な自然や文化と触れ合う中で見出した体験的な課題を、個々の多様な見方・考え方を共有しながら探究することで、深い学びを促し、児童が自己変革を楽しむことになるであろう。

(2) 公開授業・活動

1校時 公開授業①

- 1・2年合同：生活科 「みちかな ふしぎを みつけよう」
- 3・4年（複式）：総合的な学習の時間 「生き物の生き方について考えよう」
- 5・6年（複式）：総合的な学習の時間 「竹から考えを広げよう」

2校時 公開授業②

全学年合同：総合的な学習の時間 「和太鼓演奏」 ・ 生活科 「学習発表会」

4 所感

公開授業①では、5・6年の授業を参観した。身近に存在する「竹」を題材にとりあげ、一輪挿しなどの竹製品を作ったり、実際に竹林を探索したりする中で、竹の特徴や自分と竹との関わりに気づき、考えを深めながら本時を迎えた。教師の短い発問にわずか4名の児童が次々と発言し、前者の発言に自分の発言をつなげる形で授業が進んでいった。教師もその輪の中に入っていた。「人間にとって竹はどのような存在なのか」という抽象的な課題に対しても、児童一人一人が、自分や周囲の人間を想定しながら、「欠かせない植物である」と気付くことができ、学習の積み重ねを感じた。公開授業②で、全児童が原稿無しで学習成果を発表している姿に感心した。

C分科会

「生き生きと学習し活躍する子どもを目指して」

～主体的・対話的な授業や、様々な発信の場を通して、
コミュニケーションに必要な資質の育成を目指す～

長野原町立北軽井沢小学校長 山野 悟

1 会場校 京都市立宕陰小中学校（学級数6 児童生徒数10名 職員数22名）

2 地域・学校の概要

京都市の北西部、愛宕山の中腹にある。校区の人口は約230人で、農業が主産業で米、野菜、リンゴ、ソバ、生花等を栽培している。地域の人材や自然を活かした体験活動に力を入れ、「ふるさとから学び、そして、ふるさを思う心」を培っている。また、児童生徒全員で取り組む「宕陰太鼓」は地域の自慢のひとつでもある。起源は明治6年にさかのぼり、昭和22年に宕陰中学校を併設、平成30年度からは宕陰小中学校と改称、児童7名、生徒3名の義務教育学校となった。

3 研究の概要

(1) 研究の内容

- ① コミュニケーションに必要な資質を身に付けるための、各教科での授業改善
- ② コミュニケーションに必要な資質を身に付けるための、発表の場の工夫

(2) 具体的な取組

- ① 育成したいコミュニケーション能力の明確化と評価のための規準作成
- ② 主体的・対話的な学習のあり方の研究
- ③ 双方向性コミュニケーション能力向上に向けたポスターセッションなどの発表形態の工夫
- ④ コミュニケーション能力向上の視点をもった各教科での授業改善
- ⑤ 調べたことや考えたことを整理してわかりやすく伝える場としての朝の会、帰りの会の充実

(3) 公開授業

① 公開授業Ⅰ（各教室）

2校時：1年「たしざん」 2年「三角形」 4年「面積」（算数科）
6年「水溶液の性質」（理科） 8年「いにしへの心を訪ねる～扇の的～」(国語科)
9年「地方公共団体の財政と課題」（社会科）

② 公開授業Ⅱ（体育館）

3校時：総合的な学習の時間・生活科 ポスターセッション形式による発表
1年「とういん、あきがいっぱい」 3年「宕陰の緑の山・花の園について」
4年「愛宕山・愛宕神社について」「宕陰の水について」
6年「『宕陰の活性化』って何のこと」～宕陰のまちを楽しく元気にする～
8年「修学旅行を終えて～なぜ太平洋戦争がおこったのか～」
「修学旅行を終えて～ひめゆり学徒隊～」
9年「修学旅行を終えて～集団自決・虐殺について～」

4 所感

少人数故の不便さや不利な状況を発想の転換によって、大規模校では実施不可能な「個に応じた学びの推進」がへき地校の強みであることを改めて確認した。

D分科会

「ことばの力」で「自分」を創る

～「対話のある学び」と「豊かな体験やふれあい」を通して～

安中市立細野小学校長 萩原 孝志

1 会場校 亀岡市立畑野小学校（学級数7 児童数46名 職員数12名）

2 地域・学校の概要

亀岡市の中心部から車で30分ほどの西部に位置し、周辺には野鳥が多数生息したり多様な植生が見られたりするなど、自然豊かな環境に恵まれている。昭和50年代中頃までは全校児童数が40～50名程度であったが、町内の宅地造成・住宅開発が進められた結果、児童数が急激に増加し、平成に入って一時は400名を超える中規模校になる状況が生じた。その後、開発された住宅地で育った世代も成人後は地域を離れるなどして、児童数は漸次少なくなり、平成20年度からは各学年1学級、特別支援学級1学級の学級編成となっている。今、「地域と共にある学校」として、地域の教育的資源を教材として最大限に活用し、地域に学習課題を見だし、保護者・地域の方々の協力も得ながら地域理解を深める学習を進めている。

3 研究の概要

(1) 研究の内容（研究仮説）

- ① 「対話のある学び」を通して「ことばの力」と「ことばを使う喜び」を実感させることができれば、自分の学びが確かなものになったり、学びを深めたりすることになるであろう。
- ② 知識を覚える記憶型の学習ではなく、ことばを使った「対話のある学び」や「豊かな体験やふれあい」を重視した学習の過程においてこそ、思考力や判断力、表現力が育まれるとともに、知識や技能が定着し、子どもたちの学習意欲や自己肯定感が高められるであろう。

(2) 公開授業

① 公開授業Ⅰ

やまびこ（生活単元）「楽しいクッキング～旬の野菜を生かして～」

1年生活「生き物となかよし」

2年生活「もっと行きたいな 町たんけん」

3年社会「農家の仕事」

4年社会「ごみのしよりと利用」

5年国語「明日をつくるわたしたち」

6年総合「ディスカバリー京都～世界や全国の人に京都をアピールしよう～」

② 公開授業Ⅱ 全学年 国語 全校発表（地域紹介）&わくわくお話タイム（ホースターセッション）

4 所感

公開授業Ⅰでは、どの学年の授業も、単元の指導計画の中に、生き物の実際の観察や、地域の人との実際のふれあい、地域に出での体験など、「地域での豊かな体験やふれあい」が意図的に組み入れられていて、その上で、分かったことや伝えたいこと、伝える方法などをグループで交流し合い、「対話のある学び」となるようにしていた。

公開授業Ⅱの後半の「わくわくお話タイム」は、低・中・高学年ブロックに分かれてのスピーチ活動で、一人一人が学年に応じた話題に対して、メモも見ずに堂々とスピーチし、それに対して聞き手が質問や感想をしっかりと述べていた。

どちらの授業も、これまでの2年間の地道な取組の成果であると感じた。さらに、基盤として、学びを深めることのできる集団づくりが大切と考え、教室が安心できる場所・自分の存在の意味を感じられる場所となるよう、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング等も行っていったということを知り、学びの土台づくりの大切さを強く感じた。

E分科会

自ら考え、伝え合い、学ぶ喜びを実感する児童の育成

～美山学の実践を通して～

中之条町立六合小学校長 山本 政行

1 会場校 南丹市立美山小学校（学級数7 児童数134名 職員数15名）

2 地域・学校の概要

南丹市は京都府のほぼ中央に位置し、平成18年1月に4町（園部、八木、日吉、美山）が合併して誕生した人口約3万2千人のまちである。美山小学校のある美山地域は、南丹市北部に位置し、西日本屈指の広大な面積を有する芦生原生林などの森林資源や、日本の原風景とも言われる風景が残る中山間地域である。その環境を生かした観光客誘致に取り組み、知井地区北集落の重要伝統的建造物群保存地区「かやぶきの里」をはじめ、町内各地に年間90万人が訪れている。

美山小学校は、南丹市立小学校再編整備により、平成28年4月に知井小学校、平屋小学校、宮島小学校、鶴ヶ丘小学校、大野小学校の5校が一つになって誕生した。開校以来、3年目を迎え、再編前と同様に地域の人々の教育への熱い思いとともにある学校である。

3 研究の概要

(1) 研究内容

文部科学省の指定「少子化・人口減少に対応した活力ある学校推進事業」のもと、地域とともにある学校づくりを核にした研究を推進している。

① 研究のねらい

ア 広大な学校区における多様な教育資源を最大限に生かし、教育内容づくりや教材開発を行い、地域の教育力に裏打ちされた質の高い学力を児童に身に付けさせる。

イ 再編前の各地域が育んできた連携・つながりをさらに深め、美山小学校の子どもたちを全体で育てる協働意識を高め、地域の活性化を図る。

(2) 公開授業

① 1校時

特別支援学級	生活単元	（美山学）	4年	社会科	（美山学）
1年	生活科	（美山学）	5年	道徳	（美山学）
2年	生活科	（美山学）	6年	総合的な学習の時間	（美山学）
3年	社会科	（美山学）			

② 2校時 児童発表

- 全校活動
- 「美山学」学習発表（6年）

4 所感

美山小学校は、5校が合併してできた今年3年目を迎える新しい学校である。そこで学ぶ児童は、大変落ち着いており、また、非常に生き生きとしている。地域との連携・協働による教育活動を「美山学」と位置付け、全校で取り組んでいる。具体的な実践としては、問題解決的な学習による児童主体の授業づくり、また、9年間を見通した「美山学」カリキュラムの検証と整理改善に取り組んでいる。どの授業を見ても先生方の指導力の高さと情熱を強く感じるとともに、児童も積極的に挙手をして意見を述べるなど、学習意欲の高さや郷土を大切に思う気持ちが感じられた。地域の方を講師として招く学級もあり、学校と地域との連携が良好であることや地域の教育力の高さも強く感じた。

F 分科会

どのような場面でも自分の考えを豊かに表現し、 主体的に発信する児童生徒の育成

～9年間のふるさと教育、多様な学習形態を通して～

草津町立草津中学校長 角田 栄寿

1 会場校 綾部市立上林小・中学校（学級数11 児童生徒数 小21名・中16名 職員数18名）

2 地域・学校の概要

綾部市は京都府北部の市で、舞鶴・若狭と福知山、京都を結ぶ交通の要衝にある「蚕都綾部」と言われ、古くから養蚕のまちとして発展してきた。上林小・中学校のある上林地区は、綾部市の東部に位置し、市の総面積の3分の1を越える広さを有している。

上林小・中学校は、年々過疎化や高齢化が進む中で「地域に学校を残したい」という地域の方の強い思いのもと、平成27年度に校区に一つずつあった小学校と中学校が統合し、施設一体型上林小・中一貫校として開校した。施設一体型である利点を生かし、学校行事や児童・生徒会活動などを小・中合同で取り組んでいる。また、中学校から小学校への乗り入れ授業や小・中合同の研究会などを通し、9年間を見据えた教育活動を行っている。

3 研究の概要

(1) 研究内容

上林小・中学校では、以下の2点の仮説を軸として研究を進めている。

研究仮説

- I 小・中9年間の学習内容の系統性を大切にしつつ、少人数の長所を生かし、それぞれの教科や内容ごとに適した言語活動の充実や学習形態の工夫をすることにより、豊かな表現力を育成できるのではないか。
- II 9年間のふるさと教育を通して、上林の「自然・文化・歴史・人の生き方」について学ぶことで、児童生徒の心の中に「ふるさと」をつくり、その「ふるさと」が基盤となって自分の夢に向かい未来を拓く力になるのではないか。

(2) 公開授業

- ① 1校時 小1・2年【国語科】 小3年【外国語活動】、
小4年【総合的な学習の時間】 小5・6年【音楽科】
中1年【理科】 中2年【国語科】 中3年【数学科】
- ② 2校時 小全校【生活科・総合的な学習の時間】「ふるさと学習の発表」
中全校【総合的な学習の時間】「キャリア教育」

4 所感

会場校に着き公開授業の始まる前、体育館で生徒から、「先生は、どちらからいらっしゃったのですか？」「そちらの方言があったら教えて下さい。」とインタビューされた。中学2年の国語「方言と共通語」の学習の一環としての活動であった。とても温かい気持ちで分科会が始まった。研修主題に「どのような場面でも・・・」とあるが、生徒にとっても、本研究大会で貴重な体験ができたと思う。

上林小・中学校では「地域で学ぶ・地域に学ぶ・地域と学ぶ」をテーマに、ふるさと教育を実践している。へき地ならではの特性を生かし、地域・家庭との連携・協働により「社会に開かれた教育課程」を実現する体制づくりが進んでおり、有意義な研修となった。

G分科会

自ら考え、表現する児童の育成

～言語活動の充実を図り、学び合いのある授業づくり～

沼田市立利根中学校 登坂 一彦

1 会場校 伊根町立伊根小学校（学級数6 児童数43名 職員数11名）

2 地域・学校の概要

伊根町は、京都府北部、丹後半島の北に位置し、南は宮津市、西は京丹後市に隣接している。町内の伊根浦には、船の収納庫の上に住居を構えた舟屋が建ち並び、国の重要文化財保存地区に選定され、この建物を目的に観光に来る人も多い。

伊根小学校では、「海と地域とが最も近い学校」として家庭・地域との連携を図りながら、「ふるさと学」を中心に地域の特色を生かした児童の学びを推進している。また、平成27年度には、京都府教育委員会から「食に関する指導充実事業」の指定を受け、地産地消を重視した学校における食育を推進し、日本一の給食と「ふるさと」を愛する児童の育成に取り組んでいる。

3 研究の概要

(1) 研究仮説

言語活動の充実を重視し、「考えたことを表現する力」を育成する指導方法の工夫・改善を図ったり、表現する場を効果的に仕組んだりすれば、主体的に学び表現する児童を育成することができるであろう。

(2) 研究内容

① 言語活動の充実を重視した授業づくりの実践研究

- ア 思考を深めるための言語活動の充実
- イ 学び合う場の充実
- ウ 他教科との関連及び小中連携

② ふるさと学(生活科・総合的な学習の時間)の実践研究

- ア 表現力の育成を目指し、多様に表現する場や機会の設定
- イ 小・中学校9年間を見通した指導の充実

(3) 公開授業

① 公開授業Ⅰ 全学年：算数科（3・4年は複式、他は単式）

② 公開授業Ⅱ 全学年：生活科及び総合的な学習の時間（「ふるさと学」発表）

公開授業Ⅰでは、3・4年生の複式授業を参観した。担任が一方の学年を指導をする間、もう一方の学年では児童の一人が学習リーダーとなり、時計を見て次の活動に移ったり一部の児童に発言が偏らないよう指名したりしながら授業を進めていた。学習リーダーは全児童が順番に担当するとのことである。公開授業Ⅱは、児童が伊根町について調べてきたことを参観者に伝えるという学習で、低・中・高学年ごとに発達段階に応じた方法で発表していた。

4 所感

へき地小規模校では、児童生徒に対するきめ細かな指導がしやすいが、教師の指示や支援を当てにして自主性や主体性が育ちにくい面もある。しかし、伊根小学校の実践から、教師が目指す児童像を共有し組織的・系統的に指導を積み重ねれば、子どもたちの自主性・主体性が確実に伸びることを実感した。また、「ふるさと学」の取組を通じて、子どもたちが地域への愛着を強めていることが伝わってきた。本校においても、利根小学校との連携強化も視野に、系統的な教育活動の改善・充実に取り組んでいきたい。

H分科会

主体的に学び、伝え合う力を身に付けた生徒の育成

～ふるさと学＜伊根学＞の実践を通して～

片品村立片品中学校長 雲越 誠司

1 会場校 伊根町立伊根中学校（学級数3 生徒数30名 職員数13名）

2 地域・学校の概要

伊根町は京都府北部、丹後半島の北端に位置し、東から北は日本海に面し、南は宮津市に、西は京丹後市に隣接している。町全体の面積の80%を森林が占めている。船の収納庫の上に住居を備えた「舟屋」が有名であり、平成17年に漁村で初めて「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、平成20年に「日本で最も美しい村連合」に加盟した。

伊根中学校は平成26年に本庄中学校と統合した。景観や環境に配慮し、木材を多用した新校舎が建築され、30名の生徒が恵まれた環境の中で学習に取り組んでいる。「知・徳・体の調和のとれた発達を図ることを目指し、地域の特性を生かした教育活動の充実に努め、地域に開かれた学校づくりを推進する」という学校教育目標のもと、ふるさと学習＜伊根学＞等、様々な教育活動に地域とともに取り組んでいる。

3 研究の概要

(1) 研究内容

- ① 伊根学初級 –「なぜ」から始める–（フィールドワーク・和東中学校との交流 in 和東）
生徒は、地域のことについて多くの知識があり、当たり前前の光景となっている。既知の知識に自ら疑問や課題を設定し、「自分たちの暮らしはすごい」ことに自ら気付かせることで、主体的に学ぶ態度を育成する。
- ② 伊根学中級 –受け入れ、深める–（社会人講話・パネルトーク「伊根町未来への宣言」）
地域の中で地域の方から話を聞く、質問する、体験するなど、直接「見る・聞く・話す・触れる・考える」ことを繰り返し、学びの深化、広がりを通して課題解決力を身に付けさせる。
- ③ 伊根学上級 –伝え合い、発信する–（修学旅行「伊根町PR活動」・伊根浦めぐり）
資料やガイドブックにない、「ぼくらの暮らし」の魅力やおもしろさを生徒同士、地域の方、町外の方々にいかに伝えるかを考え、相手の興味をひく伝え方を身に付け、さらに将来につながる、地域とつながる力を育成する。

(2) 公開授業

公開授業Ⅰ・Ⅱとも、全校生徒による総合的な学習の時間「伊根浦めぐり」であった。大会参加者を7グループに分け、1グループに2名の生徒がガイドとして付いた。また、所々に生徒が配置され、その場所についての説明を行った。約2時間の生徒ガイドによる「伊根浦めぐりツアー」が行われた。

4 所感

本校では本年度より、「片品学」の実践を始めた。そこで、本研究大会に参加するに当たり、伊根中学校での「伊根学」の取組を是非見てみたいと考え、H分科会への参加を希望した。

研究成果として、「生徒がふるさとへの誇りと愛着をもつことができた。」「生徒に自分も地域の一員であるという意識が芽生えた。」「生徒の自己肯定感・自己有用感が高まった。」「生徒の発信力が高まった。」ことなどが挙げられていた。まさに本校の「片品学」で目指している方向と一致していた。このことに自信を得て、今後も「片品学」の実践に取り組んでいきたいと考える。

I 分科会

伝え合い、主体的に学ぶ児童の育成

～個の活躍する学校～

群馬県教育委員会事務局吾妻教育事務所指導主事 朝比奈 幾哉

1 会場校 京丹後市立宇川小学校（学級数 7 児童数 55 名 職員数 11 名）

2 地域・学校の概要

京都府の最北端に位置し、周囲には経ヶ岬灯台がある山陰海岸国立公園、アユが遡上する清流の宇川、スキー場や高原牧場があり、海と山、それをつなぐのと川の豊かな自然に恵まれた環境にある学校である。地域の主な産業は、農業・機業・漁業であるが、転職や共働き、他地区に勤めに出る人が年々多くなり、地域で働いている人は高齢者が多くなっている。本校は昭和 50 年に 2 小学校と 2 分校が統合し、今年度で 43 年目の学校。さらに、平成 28 年度からは、近隣の 2 つの保育園・こども園と 2 小学校 1 中学校とともに「丹後学園」として、施設分離型の小中一貫教育を実施している。丹後学園の教育目標、目指すこども像の具現化に向け、宇川小学校では学校像を「個の活躍する学校」とし、少人数の強みを生かし、児童一人一人が豊かにコミュニケーションをとりながら主体的に活動し、誰もが活躍できる学校を目指し教育活動を進めている。

3 研究の概要

(1) 研究の内容

個に応じたきめ細やかな指導を行うことや児童一人一人の活躍する場を多く設定することを大切に「伝え合うこと」からコミュニケーション能力の育成を図る研究を行っている。

研究仮説 1 相手意識や目的意識をもたせ、言葉で伝えるための技能を身に付けさせることで、児童は自分の思いや考えをより適切に伝え合うのではないかと。

研究仮説 2 地域学習や異年齢活動の中で多様なやり取りを経験させることで児童は状況に合わせて伝え合う力を伸ばすのではないかと。

(2) 公開授業

2 校時 公開授業 I 1 学年・2 学年・6 学年：国語科
3 学年・4 学年・5 学年：総合的な学習の時間

3 校時 公開授業 II 1 学年：生活科 3 学年：学級活動 6 学年：総合的な学習の時間

4 所感

公開された国語科の授業では、どの学年も導入において、前時の振り返りから「めあて」につなげ、これまでの取組を振り返らせながら本時の見通しをもたせ、学びに向かう意欲を引き出していた。また、総合的な学習の時間や特別活動では、児童同士の意見交換や議論が積極的に行われており、国語科で身に付けた力を意図的に活用させて研究主題にもある「個の活躍できる活動」として実践されていた。さらに小規模校のよさ（＝地域連携や小小連携）を学びに取り入れ、充実した教育活動も進めていた。

本校の周辺にある地域資源を教育課程に積極的に取り入れ、学校全体の児童の学びを充実させている点や、少人数であっても一人一人のよさを見取り、児童の主体的に学ぶ意欲を引き出し、考え・学ばせる授業づくりを進めている点において、県内のへき地教育の充実に向けたヒントや手掛かりになると強く感じた。

資料

I 平成30年度 へき地学校資料

〈1〉 級別へき地学校数

平成30. 5. 1 現在

校種別 \ 級別	級別								A 計 分校	B 県全体 分校	A —— B
	県準	特地	国準	1級	2級	3級	4級				
小学校	5	3	3	6	1	0	0	180	3082	5.8%	
中学校	4	2	2	4	2	0	0	140	1611	8.7%	
計	9	5	5	10	3	0	0	320	4693	6.8%	

〈2〉 級別へき地本校分校別学校数

〈() 内は、内数で休校中の学校である。〉

平成30. 5. 1 現在

校種別 \ 級別	級別								小計	合計
	県準	特地	国準	1級	2級	3級	4級			
小学校	本校	5	3	3	6	1	0	0	18	18
	分校	0	0	0	0	0	0	0	0	(0)
中学校	本校	4	2	2	4	2	0	0	14	14
	分校	0	0	0	0	0	0	0	0	(0)

〈3〉 級別へき地学校児童数

平成30. 5. 1 現在

校種別 \ 級別	級別								計 (A)	県全体 (B)	A —— B
	県準	特地	国準	1級	2級	3級	4級				
小学校	580	613	218	249	46	0	0	1,706	99,461	1.7%	
中学校	253	156	312	115	48	0	0	884	51,498	1.7%	
計	833	769	530	364	94	0	0	2,590	150,959	1.7%	

〈4〉 郡市別へき地学校数一覧

〈() 内は、内数で休校中の学校である。〉

平成30. 5. 1 現在

No.	郡市	学校数			内 訳							合 計	
		本校	分校	計	文 部 科 学 省 指 定					県 準			
					4	3	2	1	準		特		
1	高 崎	2小 1中		2 1						2		1	2 1
2	安 中	1 1		1 1							1	1	1 1
3	多 野	2 2		2 2			1 2	1					2 2
4	甘 楽	1		1							1		1
5	吾 妻	9 5		9 5				3 2	1 1	2 1	3 1	1	9 5
6	沼 田	1 2		1 2				1 1				1	1 2
7	利 根	3 2		3 2				1 1		1 1	1	1	3 2
総	小 計	18 14	0(0) 0(0)	18(0) 14(0)			1 2	6 4	3 2	3 2	5 4		18(0) 14(0)
	計	32	0(0)	32(0)	0	0	3	10	5	5	9		32(0)

〈5〉 複式学級の郡市別、編制別、学級一覧(小学校のみ)

平成30. 5. 1 現在

郡市	学年								学級数計	学校数
	1・2年	2・3年	3・4年	4・5年	5・6年	3・4・5年	4・5・6年			
高崎市	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1
多野郡	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1
吾妻郡	0	0	2	1	0	0	0	0	3	3
沼田市	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1
利根郡	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
計	1	2	3	1	0	0	0	0	7	7

〈6〉級別へき地学校児童・生徒数の推移（小・中学校別）

〈（ ）内は、休校中の学校である。〉

年度	県準		特地		国準		1級		2級		3級		4級		計 (A)		県全体数 (B)		(A)/(B)%	
	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校
昭50	36	18	9	2	13	3	31	7	4	1	3	0	0	96	31	313	176	30.7	17.6	
昭51	36	18	8	2	12	3	30	7	4	1	2	0	0	92	31	319	173	28.8	17.9	
昭52	36	18	8	2	12	3	29	7	3	1	2	0	0	90	31	324	172	27.8	18.0	
昭53	36	18	8	2	12	3	29	7	3	1	2	0	0	90	31	330	172	27.3	18.0	
昭54	37	18	8	2	12	3	27	7	3	1	2	0	0	89	31	337	173	26.4	17.9	
昭55	36	16	7	2	12	3	25	7	3	1	2	0	0	85	29	339	172	25.1	16.9	
昭56	36	17	7	2	12	3	24	5	3	1	2	0	0	84	28	342	172	24.6	16.3	
昭57	36	17	7	2	11	3	21	6	3	1	2	0	0	80	29	345	174	23.2	16.7	
昭58	35	17	7	2	11	3	20	6	3	1	1	0	0	77	29	347	176	22.2	16.5	
昭59	34	17	7	2	11	3	20	6	3	1	1	0	0	76	29	349	180	21.8	16.1	
昭60	32	17	7	2	11	3	20	6	3	1	1	0	0	74	29	349	184	21.2	15.8	
昭61	31	16	7	1	10	3	19	6	3	1	1	0	0	71	27	348	183	20.4	14.8	
昭62	31	16	7	1	10	3	19	6	2	1	1	0	0	70	27	366	187	19.1	14.4	
昭63	31	16	10	1	9	3	17	5	2	1	1	0	0	70	26	368	185	19.0	14.1	
平元	31	16	10	1	9	3	16	5	2	1	1	0	0	69	26	367	185	18.8	14.1	
平2	16	5	8	4	13	4	24	9	2	2	1	1	1	65	25	365	183	17.8	13.7	
平3	16	5	8	4	13	4	24	9	2	2	1	1	1	65	25	367	183	17.7	13.7	
平4	16	5	8	4	13	4	24	9	2	2	1	1	0	64	25	366	183	17.5	13.7	
平5	16	5	8	4	13	4	24	8	2	2	1	1	0	64	24	365	181	17.5	13.3	
平6	16	5	8	4	12	4	23	8	1	2	1	1	0	61	24	363	181	16.8	13.3	
平7	16	5	8	4	12	4	22	8	1	2	1	1	0	60	24	362	181	16.6	13.3	
平8	16	4	10	5	11	4	21	8	2	2	1	1	0	61	24	362	181	16.9	13.3	
平9	16	4	10	5	12	4	20	7	2	2	1	1	0	61	23	361	180	16.9	12.8	
平10	15	4	10	5	12	4	20	7	2	2	(1)	(1)	0	60	23	359	180	16.7	12.8	
平11	14	4	10	5	11	4	20	7	2	2	(1)	(1)	0	58	23	356	180	16.3	12.8	
平12	14	4	10	5	11	4	18	7	2	1	(1)	(1)	0	56	22	355	179	15.8	12.3	
平13	13	4	10	5	11	4	17	7	2	1	(1)	(1)	0	54	22	353	179	15.3	12.3	
平14	12	5	8	3	14	4	16	7	1	1	(1)	(1)	0	52	21	352	179	14.8	11.7	
平15	12	4	8	4	13	4	15	7	0	1	(1)	(1)	0	49	21	350	179	14.0	11.7	
平16	12	3	8	4	13	3	11	6	0	1	(1)	(1)	0	45	18	347	176	13.0	10.2	
平17	12	4	7	3	13	3	10	6	0	1	(1)	(1)	0	43	18	345	175	12.5	10.3	
平18	12	4	7	3	13	3	10	6	0	1	(1)	(1)	0	43	18	345	175	12.5	10.3	
平19	11	4	7	3	13	3	10	6	0	1	(1)	(1)	0	42	18	344	175	12.2	10.3	
平20	10	4	6	3	12(1)	3	9	6	0	1	(1)	(1)	0	39	18	340	173	11.5	10.4	
平21	10	4	6	3	12	3	9	6	0	1	(1)	(1)	0	38	18	340	171	11.2	10.5	
平22	17	8	3	2	6	2	8	5	2	2	(1)	(1)	0	37	20	339	171	10.9	11.7	
平23	14	7	3	2	6	2	7	5	2	2	(1)	(1)	0	33	19	333	169	9.9	11.2	
平24	13	7	3	2	6	1	7	5	2	2	(1)	(1)	0	32	18	329	168	9.7	10.7	
平25	10	7	2	2	6	1	7	5	2	2	(1)	(1)	0	28	18	324	168	8.6	10.7	
平26	9	6	2	2	6	1	7	5	2	2	(1)	(1)	0	27	17	322	167	8.4	10.2	
平27	8	5	2	2	6	1	6	4	1	2	(1)	(1)	0	24	15	318	164	7.5	9.1	
平28	6	4	3	2	3	2	6	4	1	2	(1)	(1)	0	20	15	312	162	6.4	9.3	
平29	5	4	3	2	3	2	6	4	1	2	0	0	0	18	14	308	161	5.8	8.7	
平30	5	4	3	2	3	2	6	4	1	2	0	0	0	18	14	308	161	5.8	8.7	

II 平成30年度 群馬県へき地教育振興会役員

平成30. 6. 28現在

会 長 星野巳喜雄（沼田）

副会長 田村 利男（多野：神流町長）

小林 靖能（吾妻：吾妻郡町村教育委員会
連絡協議会会長）

梅澤 志洋（利根：片品村長）

理事 飯野 眞幸（高崎：高崎市教育長）

竹内 徹（安中：安中市教育長）

黒澤 右京（多野：上野村教育長）

碓井 良一（甘楽：南牧村教育長）

小林 靖能（吾妻：吾妻郡町村教育委員会
連絡協議会会長）

星野巳喜雄（沼田）

梅澤 志洋（利根：片品村長）

評議員

郡 市	町 村	評 議 員
高 崎 市		飯 野 眞 幸（教育長）
安 中 市		竹 内 徹（教育長）
多 野 郡	上 野 村	黒 澤 右 京（教育長）
	神 流 町	山 田 孝 行（教育長）
甘 楽 郡	南 牧 村	碓 井 良 一（教育長）
吾 妻 郡	中之条町	宮 崎 一（教育長）
	長野原町	市 村 隆 宏（教育長）
	嬭 恋 村	黒 岩 優 行（教育長）
	草 津 町	中 澤 隆（教育長）
	高 山 村	山 口 廣（教育長）
	東吾妻町	小 林 靖 能（教育長）
沼 田 市		大 竹 孝 夫（教育長）
利 根 郡	片 品 村	吉 野 隆 哉（教育長）
	昭 和 村	吉 澤 博 通（教育長）
	みなかみ町	田 村 義 和（教育長）

監 事 市 村 隆 宏（吾妻：長野原町教育長） 吉 野 隆 哉（利根：片品村教育長）

平成30年度 へき地教育振興会事務局及び郡市町村事務担当者・担当指導主事

事務局 書記・会計 帖佐 一 ・ 佐野 美幸

市町村	連 絡 先	事務担当者	へき地担当指導主事
高 崎 市	高崎市教育委員会	丸 山 剛 史	大河原 隆徳 （西部教育事務所）
安 中 市	安中市教育委員会	関 井 貴 美 枝	
上 野 村	上野村教育委員会	黒 澤 二 郎	
神 流 町	神流町教育委員会	菊 池 栞	
南 牧 村	南牧村教育委員会	小 池 悦 子	朝比奈 幾哉 （吾妻教育事務所）
中之条町	中之条町教育委員会	生 巢 孝 子	
長野原町	長野原町教育委員会	萩 原 喜 隆	
嬭 恋 村	嬭恋村教育委員会	目 黒 康 子	
草 津 町	草津町教育委員会	富 岡 弥 生	
高 山 村	高山村教育委員会	鈴 木 啓 三	
東吾妻町	東吾妻町教育委員会	田 中 早 苗	吉 野 康 弘 （利根教育事務所）
沼 田 市	沼田市教育委員会	角 田 厚	
片 品 村	片品村教育委員会	荒 木 亜 美	
昭 和 村	昭和村教育委員会	綿 貫 寿 美 子	
みなかみ町	みなかみ町教育委員会	小 倉 正 人	

Ⅲ 平成30年度 群馬県へき地教育研究連盟役員

役員

- ・理事長 角田 栄 寿 (吾妻：草津町立草津中学校)
- ・副理事長 黒澤 守 (多野：神流町立万場小学校)
- 尾澤 順子 (吾妻：東吾妻町立坂上小学)
- 登坂 一彦 (沼田：沼田市立利根中学校)
- ・常任理事 萩原 孝志 (安中：安中市立細野小学校)
- 本多 和恵 (利根：みなかみ町立藤原小中学校)
- ・事務局長 牛木 雅人 (吾妻：高山村立高山小学校)
- ・会計部長 山野 悟 (吾妻：長野原町立北軽井沢小学校)
- ・理事

ブロック 郡市	氏名	勤務校	勤務校所在地 (電話番号)	備考
A 高崎 安中 多野 甘楽	黒澤 守	神流町立万場小学校	多野郡神流町万場84-2 (0274-57-2320)	副理事長
	萩原 孝志	安中市立細野小学校	安中市松井田町新井365 (027-393-1322)	総務部長 常任理事
	根岸 勝良	上野村立上野小学校	多野郡上野村新羽32 (0274-59-2004)	
	田中 宏巳	高崎市立倉渕中学校	高崎市倉渕町岩氷215-1 (027-378-3214)	
	中町 文彦	高崎市立宮沢小学校	高崎市宮沢町1100-1 (027-374-2317)	
B 吾妻	角田 栄寿	草津町立草津中学校	吾妻郡草津町草津464-27 (0279-88-2227)	理事長
	尾澤 順子	東吾妻町立坂上小学	吾妻郡東吾妻町本宿389 (0279-69-2005)	副理事長 研究部長
	牛木 雅人	高山村立高山小学校	吾妻郡高山村中山2792-1 (0279-63-2001)	事務局長
	山本 政行	中之条町立六合小学校	吾妻郡中之条町小雨599-1 (0279-95-3571)	
	山野 悟	長野原町立北軽井沢小学校	吾妻郡長野原町北軽井沢1924 (0279-84-3010)	会計部長

C 利根 沼田	登坂 一彦	沼田市立利根中学校	沼田市利根町追貝 334 (0278-56-2044)	副理事長
	本多 和恵	みなかみ町立藤原小中学校	利根郡みなかみ町藤原 349 1 (0278-75-2102)	調査部長 常任理事
	樋口 徹	片品村立片品小学校	利根郡片品村大字鎌田 395 2 (0278-58-3126)	
	瀧聞 京子	沼田市立多那小中学校	沼田市利根町多那 732 (0278-53-2919)	
	荒木富美子	昭和村立大河原小学校	利根郡昭和村大字糸井 5455-354 (0278-24-7166)	
「板木」 実務 担当	瀧聞 京子	沼田市立多那小中学校	沼田市利根町多那 732 (0278-53-2919)	

IV 平成30年度 群馬県へき地教育センター指導員

センター名	氏 名	勤 務 先	勤務校所在地（電話番号）
吾 妻	小野塚 則幸	長野原町立第一小学校内	〒377-1309 吾妻郡長野原町大字林1394-5 (0279-82-2145)
利 根	笛田 敏行	利根教育事務所内	〒378-0031 沼田市薄根町4412 (0278-23-0165)

V 平成30年度へき地教育功労者

No.	氏名	功績の概要
1	はた みつよ 畑 光代 安中市教育委員会推薦	平成30年3月に安中市立松井田北中学校校長として退職するまで、安中市・碓氷郡内のへき地学校に17年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
2	くろさわ しげこ 黒澤 栄生子 上野村教育委員会推薦	平成30年3月に上野村立上野中学校校長として退職するまで、多野郡内のへき地学校に26年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
3	いまい ちひろ 今井 千洋 上野村教育委員会推薦	平成30年3月に上野村立上野小学校公仕として退職するまで、多野郡内のへき地学校に23年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
4	やまだ いくひさ 山田 幾久 中之条町教育委員会推薦	平成30年3月に中之条町立六合小学校校長として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に20年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
5	ふくだ みずほ 福田 瑞穂 中之条町教育委員会推薦	平成30年3月に中之条町立六合小学校教頭として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に15年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
6	せき あいこ 関 愛子 中之条町教育委員会推薦	平成30年3月に中之条町立中之条小学校教諭として退職するまで、利根・吾妻管内のへき地学校に15年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
7	まつい かずとし 松井 和寿 中之条町教育委員会推薦	平成30年3月に中之条町立六合中学校教諭として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に23年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
8	たかひら ひろひさ 高平 裕寿 長野原町教育委員会推薦	平成30年3月に長野原町立西中学校校長として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に16年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
9	たかはし かつひこ 高橋 克彦 長野原町教育委員会推薦	平成30年3月に長野原町立応桑小学校教諭として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に22年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
10	ちだ こういち 地田 功一 嬭恋村教育委員会推薦	平成30年3月に嬭恋村立嬭恋中学校校長として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に23年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
11	なかじま あけみ 中島 明美 草津町教育委員会推薦	平成30年3月に草津町立草津小学校教諭として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に33年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
12	ほしの まゆみ 星野 真弓 沼田市教育委員会推薦	平成30年3月に沼田市立利根小学校養護教諭として退職するまで、利根管内のへき地学校に17年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。

あ と が き

群馬県へき地教育資料「板木」第67集の発刊にあたり、ご指導下さいました群馬県教育委員会の皆様をはじめ、ご協力いただきました関係各位に心より感謝申し上げます。

「板木」は、昭和27年に群馬県へき地教育の資料集として第1号が創刊され、以来途切れることなく刊行されてきました。この間、多くの方々のご努力により、群馬県におけるへき地教育の歩みを示す貴重な資料として活用され、その価値を確かなものとしています。

今年度は、第67回群馬県へき地教育研究大会が高山村立高山小学校及び高山村立高山中学校で開催されました。午前は、全体会と班別研究協議、午後からは、公開授業及び授業研究会が行われ、へき地教育についての考えを深める貴重な機会となりました。そこで紹介されたへき地のよさを生かした学校経営や公開授業とともに、学習指導・生徒指導の実践、第67回全国へき地教育研究大会（京都大会）の報告等もこの「板木」に掲載させていただきました。各校の教育実践の参考にしていただければ幸いです。へき地教育の推進を図っていく一方で、児童生徒数の減少により、へき地校の状況は厳しくなっていますが、みんなで力を合わせ、へき地教育を盛り上げていきたいものです。

今年度も、へき地教育に携わる多くの方々から、原稿執筆や編集等のご協力をいただき、無事にへき地教育の記録を残すことができました。心からお礼申し上げます。完成した「板木」第67集が、今後のへき地教育推進の資料としてより多くの方々に活用されることを願っております。

なお、「板木」作成に携わった編集委員は、以下の通りです。

群馬県教育委員会事務局	鈴木 佳子（義務教育課長）
	春田 晋（義務教育課 教科指導係長）
	帖佐 一（義務教育課 教科指導係 指導主事）
	佐野 美幸（義務教育課 教科指導係 指導主事 板木担当）
群馬県へき地教育研究連盟	角田 栄寿（県へき連 常任理事・理事長）
	尾澤 順子（県へき連 常任理事・副理事長・研究部長）
	黒澤 守（県へき連 常任理事・副理事長）
	登坂 一彦（県へき連 常任理事・副理事長）
	牛木 雅人（県へき連 常任理事・事務局長・総務部）
	萩原 孝志（県へき連 常任理事・総務部長）
	本多 和恵（県へき連 常任理事・調査部長）
	山野 悟（県へき連 常任理事・会計部長・総務部）
	根岸 勝良（県へき連 理事・研究部・広報担当）
	中町 文彦（県へき連 理事・総務部・新聞担当）
	田中 宏巳（県へき連 理事・監査・調査部）
	樋口 徹（県へき連 理事・研究部）
	荒木富美子（県へき連 理事・監査・調査部）
	山本 政行（県へき連 理事・調査部・図書担当）
	瀧間 京子（県へき連 理事・総務部・板木担当）